山形県埋蔵文化財センター調査報告書第56集

北目長田遺跡

第3次発掘調査報告書

1998

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

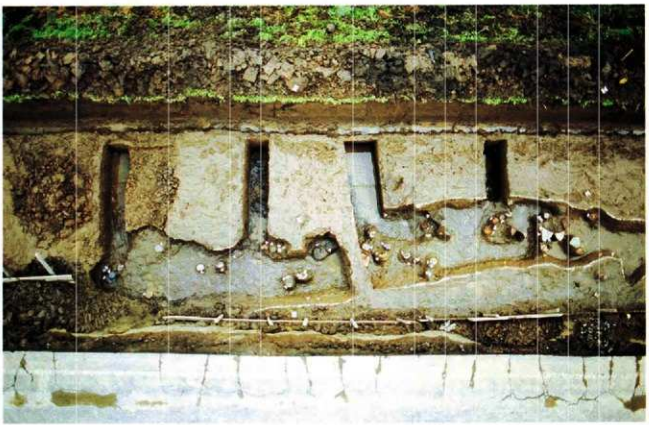
北目長田遺跡

第３次発掘調査報告書

平成10年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

調査区全景空中写真（南から）



S G702 河川跡遺物出土状況（手前西）

S G702 河川跡出土遺物

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、北目長田遺跡の第３次調査成果をまとめたものです。

北目長田遺跡は山形県の北西部、米どころとして名高い庄内平野の北端に位置し秋田県との境にある、飽海郡遊佐町に所在します。北には秀峰「鳥海山」が聳え、麓に広がる穀倉地帯は、鳥海山系を源流とする中小河川によって潤されます。また西は日本海に面しており、豊かな海山の幸に恵まれたところです。

この度、一般国道３４５号道路改築工事に伴い、工事に先立って北目長田遺跡の第３次発掘調査を実施しました。

調査では、奈良・平安時代の集落跡が確認されました。掘立柱建物跡や、畑の畝跡と考えられる溝状遺構群が数カ所で検出され、河川跡からは多数の墨書土器が出土しました。また、海水から塩を得るために使われた製塩土器や、漁網に用いる土錘なども見られました。これらの遺構や遺物は、古代の人々の暮らしぶりに思いを馳せてくれるに充分なものがあるでしょう。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務といえます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は、平成９年度一般国道３４５号道路改築工事に係る「北目長田遺跡」の第３次発掘調査報告書である。

2　調査は山形県教育委員会の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　北目長田遺跡（ＡＹＺＫＮ）　遺跡番号　平成３年度登録

所　在　地　　山形県飽海郡遊佐町大字北目字長田

調 査 主 体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター

調 査 期 間　　平成９年４月１日～平成10年３月31日

現 地 調 査　　平成９年５月６日～平成９年11月20日

調査担当者

調査第二課長	野尻　侃
主任調査研究員	尾形　與典
調査研究員	伊藤　元（調査主任）
嘱託職員	豊野　潤子
嘱託職員	飯塚　稔

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁建設部道路計画課、遊佐町教育委員会、庄内教育事務所等関係機関に協力いただいた。また出土遺物について、井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）から御教示いただいた。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は、伊藤　元、豊野潤子が担当した。編集は尾形與典、須賀井新人、菅原哲文、豊野潤子が担当し、全体については野尻　侃が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

遺構写真実測については、㈱日本テクニカルセンターに委託した。

理化学試料分析については、㈱パリノ・サーヴェイに委託した。

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＫ…土坑　ＳＧ…河川跡　ＳＤ…溝跡・溝状遺構
ＳＰ…ピット　ＳＸ…性格不明遺構　ＥＢ…掘立柱建物跡の各柱穴
ＲＰ…土器・土製品　ＲＷ…木製品　ＲＭ…金属製品　ＲＱ…石製品

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。

3　土層観察においては、遺跡を覆う基本層序をローマ数字（Ⅰ～Ⅳ）で表し、遺構の埋積土等については「Ｆ」に算用数字を付して区別した。

4　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

（1）　調査区概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

（2）　グリッドの南北軸はＮ－44°－Ｗを測る。

（3）　遺構実測図は、1/20・1/40・1/50・1/80・1/100・1/160・1/400縮尺で採録し、各々にスケールを付した。

（4）　遺構実測図・土層断面図中における水糸レベル標高の単位はｍである。

（5）　遺構実測図・土層断面図中において、土器はｐ、礫石はｓ、木材はｗで表示し、ｓ・ｗについては、それぞれ網目・綾目のスクリーントーンで表示した。

（6）　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物図版とも共通のものとした。一部、遺物番号と登録番号を併せて掲載している。

（7）　遺物実測図・拓影図は、原則的に1/4で採録しているが、一部の大型土器は1/6、陶磁器は1/2で採録し、各々にスケールを付した。遺物図版については、1/3を基本としているが、一部1/2・1/6・1/8で掲載したものについては、各々に表示した。

（8）　遺物実測図中の古代土器については、須恵器は断面黒ベタ、赤焼土器は断面白抜き、黒色土器は内面半分に黒スクリーントーンで表示した。

（9）　土器拓影図で、器表面の拓本は断面左側に表した。

（10）　遺物観察表中において、（　）内数値は図上復元による推定値を、〔　〕内数値は残存値を示している。

（11）　遺構覆土の色調の記載については、1997年版の農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。陶磁器観察表中の色調についても参照した。

目　次

Ⅰ　調査の経緯
1　調査に至る経過 …… 1
2　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
1　地理的環境 …… 2
2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要
1　調査の概要 …… 4
2　遺跡の層序 …… 5
3　遺構と遺物の分布 …… 5
Ⅳ　検出された遺構
1　掘立柱建物跡 …… 11
2　土坑 …… 14
3　溝状遺構群 …… 19
4　河川跡 …… 24
Ⅴ　出土した遺物
1　土器 …… 27
2　陶磁器 …… 30
3　土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨 …… 54
Ⅵ　総　　括 …… 59

報告書抄録 …… 62

付図　北目長田遺跡遺構配置図（第１次・第２次・第３次合成）

表

表１　調査工程表 …… 4
表２　出土土器観察表（１） …… 45
表３　出土土器観察表（２） …… 46
表４　出土土器観察表（３） …… 47
表５　出土土器観察表（４） …… 48
表６　出土土器観察表（５） …… 49
表７　陶磁器観察表 …… 49
表８　墨書集成（１） …… 52
表９　墨書集成（２） …… 53
表10　土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨観察表 …… 58

挿　図

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　調査概要図 …… 4
第３図　基本層序 …… 6
第４図　遺構配置図 …… 7
第５図　遺物分布図 …… 9
第６図　ＳＢ１掘立柱建物跡 …… 12
第７図　ＳＢ２掘立柱建物跡・
　　ＳＤ231溝跡 …… 13
第８図　土坑（１） …… 16
第９図　土坑（２） …… 17
第10図　土坑（３） …… 18
第11図　溝状遺構群（１） …… 20
第12図　溝状遺構群（２） …… 21
第13図　溝状遺構群（３） …… 22
第14図　溝状遺構群（４）・ＳＧ10河川跡 … 23
第15図　ＳＧ702河川跡
　　出土遺物垂直分布図 …… 25
第16図　包含層出土土器 …… 31
第17図　掘立柱建物跡出土遺物・
　　土坑出土遺物（１） …… 32
第18図　土坑出土遺物（２） …… 33
第19図　土坑出土遺物（３）・
　　溝跡出土遺物（１） …… 34
第20図　溝跡出土遺物（２）・
　　河川跡出土遺物（１） …… 35
第21図　河川跡出土遺物（２） …… 36
第22図　河川跡出土遺物（３） …… 37
第23図　河川跡出土遺物（４） …… 38
第24図　河川跡出土遺物（５） …… 39
第25図　河川跡出土遺物（６） …… 40
第26図　河川跡出土遺物（７） …… 41
第27図　河川跡出土遺物（８） …… 42
第28図　製塩土器（１） …… 43
第29図　製塩土器（２）・陶磁器 …… 44
第30図　墨書集成（１） …… 50
第31図　墨書集成（２） …… 51
第32図　土製品・石製品 …… 55
第33図　木製品（１） …… 56
第34図　木製品（２）・金属製品・銭貨 … 57

図　版

巻頭図版１　調査区全景空中写真
巻頭図版２　ＳＧ702河川跡
　　遺物出土状況（上）
　　出土遺物（下）
図版１　遺跡近景・遠景
図版２　作業風景・基本層序他
図版３　ＳＢ１掘立柱建物跡検出状況他
図版４　ＳＢ２掘立柱建物跡検出状況他
図版５　ＳＫ250土坑検出状況他
図版６　ＳＫ459土坑検出状況他
図版７　ＳＫ378土坑検出状況他
図版８　溝状遺構群検出状況他
図版９　ＳＧ702河川跡土層断面他
図版10～20　出土土器（１）～（11）
図版21　製塩土器・陶磁器他
図版22　土製品・石製品・木製品（１）
図版23　木製品（２）・金属製品・銭貨
図版24　北目長田遺跡出土炭化材

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

遊佐町北西部に位置する宮田・富岡・北目・山崎などの各地区一帯には、庄内高瀬川や月向川に流れに沿って平安時代を主とする遺跡が数多く分布している。これまで、山形県教育委員会や山形県埋蔵文化財センターによりほとんどの遺跡で発掘調査が行われてきた。

本遺跡でも、平成２年度の秋から遺跡の分布や保存状況・範囲などの確認を目的とした詳細な分布調査を県教育委員会が継続的に実施してきた結果、東西560ｍ・東北210ｍの範囲に広がる平安時代の集落跡であることが確認された。そして、平成６・７年度には、県営ほ場整備事業によりやむを得ず削平される部分について、財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となって、緊急発掘調査を行っている（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第24・31集）。

今回の３次調査は、一般国道345号道路改築工事を原因としている。当初、今回の調査は国道345号の西側６ｍの側道建設予定部分(3,300㎡)に限って行うことが計画されていた。しかし、工事方法の変更のため、県庄内支庁建設部道路計画課・県教育庁文化財課などの関係機関との間で協議を重ねた結果、側道建設予定部分の他に、現345号東西両側の路肩部分も調査の必要があると判断され、当初計画の倍の6,600㎡について調査を行うことになった。それに伴い、調査期間も平成９年５月６日から同11月20日までに変更された。

2　調査の経緯

平成９年４月23日、庄内支庁にて国道345号に係る遺跡発掘調査の打ち合わせ会を開催した。国道345号の工事とも絡み、庄内支庁建設部道路計画課で工事施工業者への発注が完了するまで当初計画していた345号の西側６ｍ幅区域の調査を進めることにした。５月６日に調査事務所を設置し、現地調査を開始した。調査区の位置・内部の区画などを示すグリッドは、ほ場整備時の基準と平行にし、Ｘ軸は西から東にＡ～Ｅ、Ｙ軸は、北から南に－７～119として、Ａ-１グリッド（以下、Ａ-１Ｇというように表記する）というように表記した。

７月24日、国道345号の工事施工業者が決まり、庄内支庁を交え三者で今後の調査の進め方について打ち合わせを行った。その結果、国道345号の西側は中央の農道をはさんで南側をＡ区、北側をＢ区とし、345号の東側については中央の道路をはさんで北側をＤ区、南側をＥ区とし、調査の終了した区域から順次引き渡しを行い、仮路盤を作ることとした。また、調査を行っている区域については片側交互通行を行い、引き渡し終了後の工事期間は現場での調査を休みにすることとした。以下にその後の調査を列記しておく。

８月４日Ａ調査区東側３ｍの表土除去を行い調査に入り、同29日引き渡しを行った。９月８日Ｂ区の東側３ｍの表土除去を行い調査を再開。９月30日同区の調査を終了し引き渡しを行った。10月６日～９日にかけてＣ区、10月13日～24日にかけてＤ区、11月４日～11月20日にかけてＥ区の調査を行い、11月20日に現場事務所を撤収した。なお、９月25日、11月19日に調査成果を公表するための調査説明会を開催した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

北目長田遺跡は、遊佐町の中心街から北西へ約3㎞の水田地帯に位置する。遊佐町は、山形県の北西部に広がる庄内平野の北端にあり、北に「出羽富士」と称えられる鳥海山を望む。西は日本海に面し、吹浦漁港や西浜海水浴場がある。海岸に沿ってのびる庄内砂丘では、メロンの栽培が盛んに行われているほか、平野部では柿や梨などの果樹も多くみられる。

庄内地方は海洋性の気候で、一日の気温差が小さい。日本海から吹きつける季節風により内陸と比べ、夏は湿度が低いが、冬は北西の強風となって地吹雪をおこす。そのためスギなどの屋敷森のある家々をよく見かける。

本遺跡の所在する高瀬地区一帯は、近年の県営ほ場整備事業により土地改良された地域で、鳥海山の南麓に広がる肥沃な穀倉地域である。遺跡は庄内高瀬川右岸の氾濫原に立地し、標高5.5mを測る。この辺りは「遊佐海岸低地」といわれる潟湖性の低湿地で、砂・礫・泥炭を含むたいへん軟弱な地盤となっている。水田耕作土には、地下水位を高く保つ細粒強グライ土壌が多く分布しており、そのほか河川による水成堆積の灰色低地土が認められる。

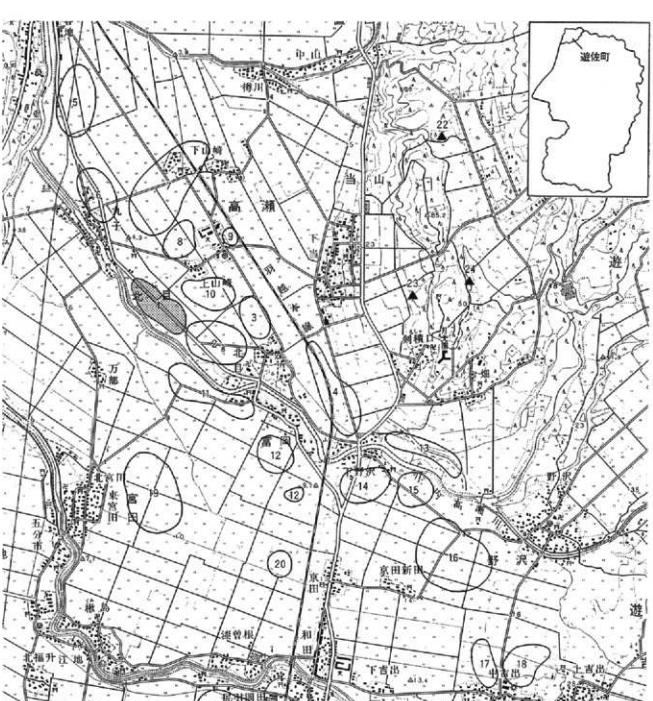
庄内高瀬川流域には、数多くの遺跡が確認されている。現在では、水田耕作などのため削平を受けたいぶ平坦化されているが、かつては河川の流路に沿って形づくられた自然堤防や後背湿地などの起伏ある地形が明確な形で残っていたと推測できる。

2　歴史的環境（第1図）

遊佐町管内ではこれまでに170カ所以上の遺跡が確認されており、県内でも有数の遺跡密集地である。この中で、本遺跡を含め、平安時代を主とする集落跡については、20を超える遺跡が発掘調査されている。高瀬川沿いに限っても、本遺跡のほかに、上高田遺跡、木戸下遺跡、宮ノ下遺跡、大坪遺跡等が連続して分布している。

これまでの調査の結果、これらの遺跡のほとんどは9世紀から10世紀にかけて継続していることが確認されている。このことは、酒田市や八幡町なども含めた飽海郡域の遺跡に共通する在り方である。つまり、9世紀に入って、この地域の様相が一変したことになる。これは、当時の律令政府が推し進めた古代東北の開拓と関わっていると推定される。712年の「出羽国」建国以降、国府や城柵の設置・移転によって、この地域に対する政府の支配が拡大または縮小していく。これらの集落はその過程の中で存在したものである。特に、本遺跡より南方約8㎞に位置する「城輪柵跡」は、出羽国井口の国府に比定され、周辺集落と密接な関係を保っていたと考えられる。遊佐町の遺跡のなかでも、緑釉・灰釉陶器と地鎮のための特殊埋設遺構を検出した下長橋遺跡、板材列を伴う掘立柱建物跡の小深田遺跡、灰釉陶器・墨書土器のまとまりと京への貢進を示す木簡が出土した大坪遺跡等、官衙関連の性格を推定できる内容を持っている。

今回の調査においては、河川跡出土の土器様相から、本遺跡の年代観がこれまでより若干遡る可能性が指摘されるため、管内でも早い段階の集落跡といえるであろう。



1．北目長田遺跡（1994・1995・1997）　2．橋詰遺跡（1994・1995）　3．宝田遺跡（1994）　4．宮ノ下遺跡（1995）　5．脇田遺跡（1992）　6．野沢遺跡　7．中田遺遺跡（1992）
8．上山崎遺跡　9．田中遺跡　10．地蔵田遺跡　11．木戸下遺跡（1994・1996）　12．上高田遺跡（1994・1996・1997）　13．温中A・B遺跡　14．石田遺跡（1992）　15．宿田遺跡（1982）
16．大坪遺跡（1990・1994）　17．三崎遺跡　18．鶴鉢遺跡（1991）　19．木原遺跡（1992・1993）　20．吉屋敷遺跡　21．小深田遺跡（1988）　22．サナミ城跡遺跡　23．鮭亀神社遺跡遺跡
24．鮭亀神社遺跡

※（　）数字は発掘調査年

第１図　遺跡位置図（国土地理院発行２万５千分の１地形図「吹浦」を使用）

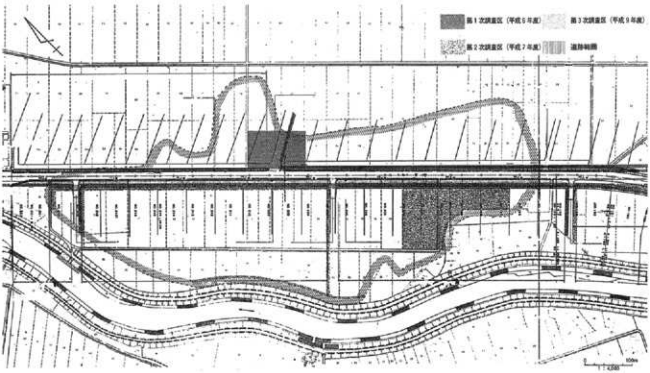
Ⅲ　調査の概要

1　調査の概要

今回の調査は、北目長田遺跡の中央を南北に走る国道345号の東西両側6,600㎡を調査対象区として実施した。A調査区からE調査区の順に、重機により表土を除去し、面整理作業を繰り返しながら遺構の検出を行い、遺構精査に入った。その間、適宜遺構平面図・断面図の作成や写真撮影など記録作業にあたった。この作業が終わった時点で各調査区ごとに空中撮影による撮影実測を行った。下記の表1にA調査区からE調査区までの調査工程をまとめた。

表－1　調査工程表

		5月	6月	7月	8月	9月			10月	11月
A調査区	調査区布掘り						C・D調査区	調査区布掘り		
	重機導入							重機導入		
	グリッド設定							グリッド設定		
	粗掘り							粗掘り		
	面整理(遺構検出)							面整理(遺構検出)		
	遺構精査							遺構精査		
	記録							記録		
	写真実測(委託)							写真実測(委託)		
	調査区引き渡し							調査区引き渡し		
B調査区	調査区布掘り						D調査区	調査区布掘り		
	重機導入							重機導入		
	グリッド設定							グリッド設定		
	粗掘り							粗掘り		
	面整理(遺構検出)							面整理(遺構検出)		
	遺構精査							遺構精査		
	記録							記録		
	写真実測(委託)							写真実測(委託)		
	現地説明会							現地説明会		



第2図　調査概要図（S＝1：4,000）

2　遺跡の層序

今回の調査では、遺跡範囲の真ん中を北西－南東に走行している国道345号に沿って、その両側を全長625ｍの平行線形に発掘している。調査区一帯はこれまでのほ場整備事業などにより、上層部の大部分は以前に削平を受けた形跡が見られる。

遺構検出面であるⅣ層上面の標高は、検査区の北端域で4.70ｍ、南端域は5.90ｍを測り、地表面からの深さは50～60㎝である。掘立柱建物跡２棟が検出され最も遺構が集中しているＢ区南端部の53～58Ｇでは標高5.50～5.60ｍであった。

基本的な層序はⅠ～Ⅳ層に捉えることができた。しかし、南北に長い調査区域のためか土色については若干の相違が見られる所もあることから、４カ所の観察地点の層序をⅠ～Ⅳとａ～ｄを用いて表示した。Ⅰ～Ⅱ層は第１次調査のⅠ層に相当し、耕作土及び水田基盤層である。概ねシルトであるが、場所によっては締まった砂質シルトが見られる。Ⅲ層は第１次調査のⅡ層に相当し、須恵器・赤焼土器などの多量の包含が認められた。面整理の段階で約70箱の遺物が出土している。全体的にシルトと言えるが、調査区北部は低湿地のため軟弱な粘質土層となっている。調査区南部は随所で撹乱されている。

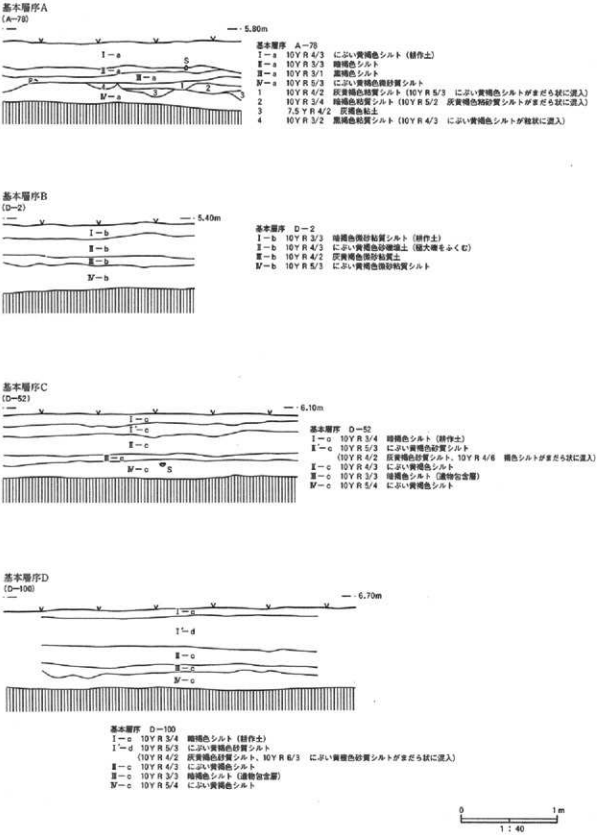
河川跡が検出されたＥ区の76～78Ｇでは、その一帯の中でも、Ⅲ層の粘性のある土壌が認められた。この地区は遺跡範囲の北東部にあたり、第１次調査で指摘された旧河道の一部である可能性も否めない。また、溝・土坑で、覆土中に一次堆積と考えられない火山灰の混在が認められた。これまでの調査によって十和田ａテフラと同定されており、今回確認された火山灰も土器の様相などから十和田ａと考えられる。

3　遺構と遺物の分布

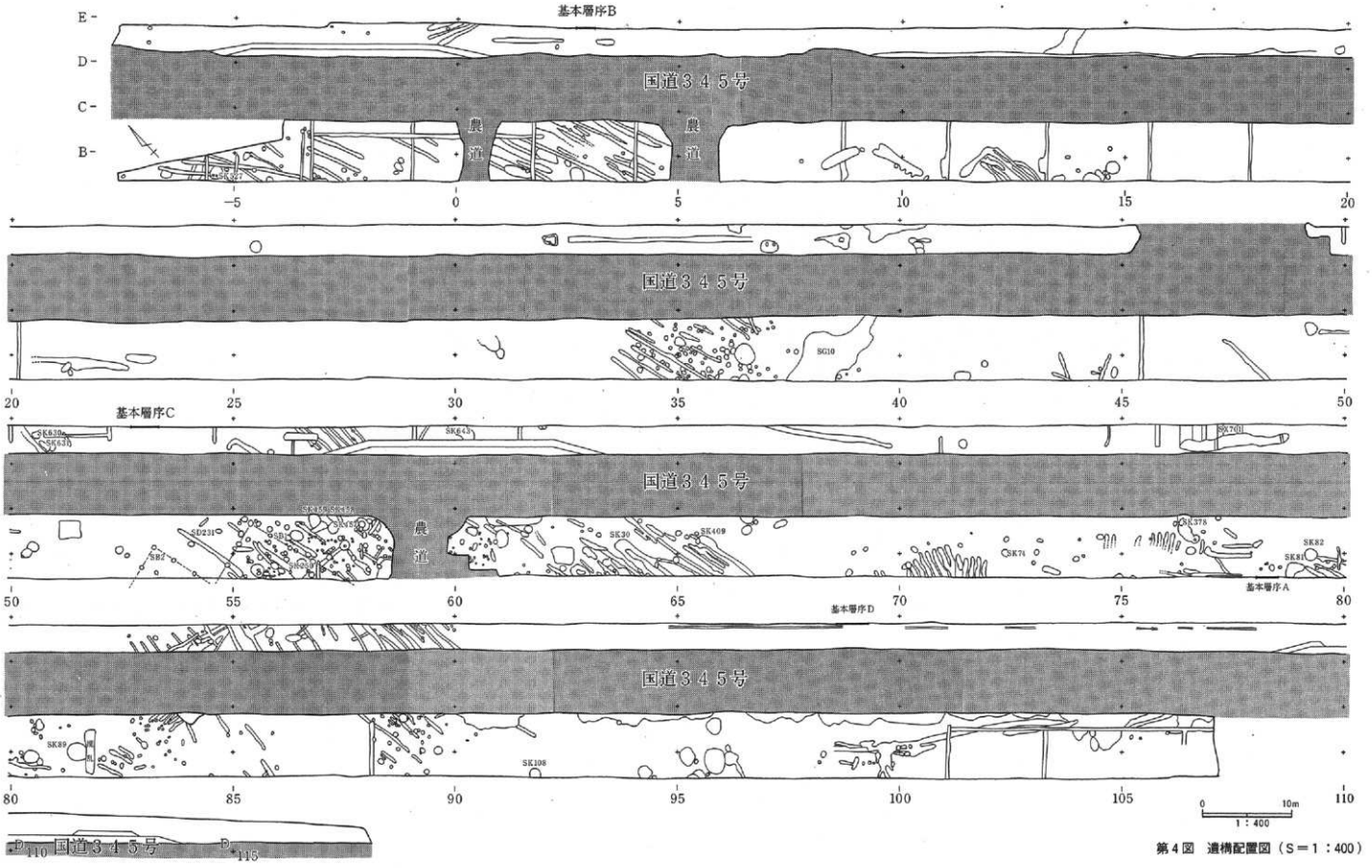
検出された遺構は、第４図に示したとおりである。調査区南北625ｍに中には、遺構の密集する区域と、希薄な区域がある。遺構の密集する区域は、Ａ－－７～５Ｇ、Ａ～Ｂ-33～40、Ａ～Ｄ-53～68Ｇ、Ａ～Ｄ-80～90Ｇと大きく４つの区域に分けることができる。

掘立柱建物跡は53～58Ｇにかけて２棟検出された。また、１次・２次調査でも検出された溝状の遺構群は、７つのまとまりが確認できた。詳しくは後述するが、３～４時期の変遷が認められる。溝跡に隣接、あるいは重複する形で円形や隅丸方形を呈する土坑も検出され、多量の土器片が出土したものもある。また、Ｂ調査区とＥ調査区に２つの河川跡が検出された。Ｅ調査区のＳＧ702からは墨書土器が約60点、その他砧や皿などの木製品などが出土している。

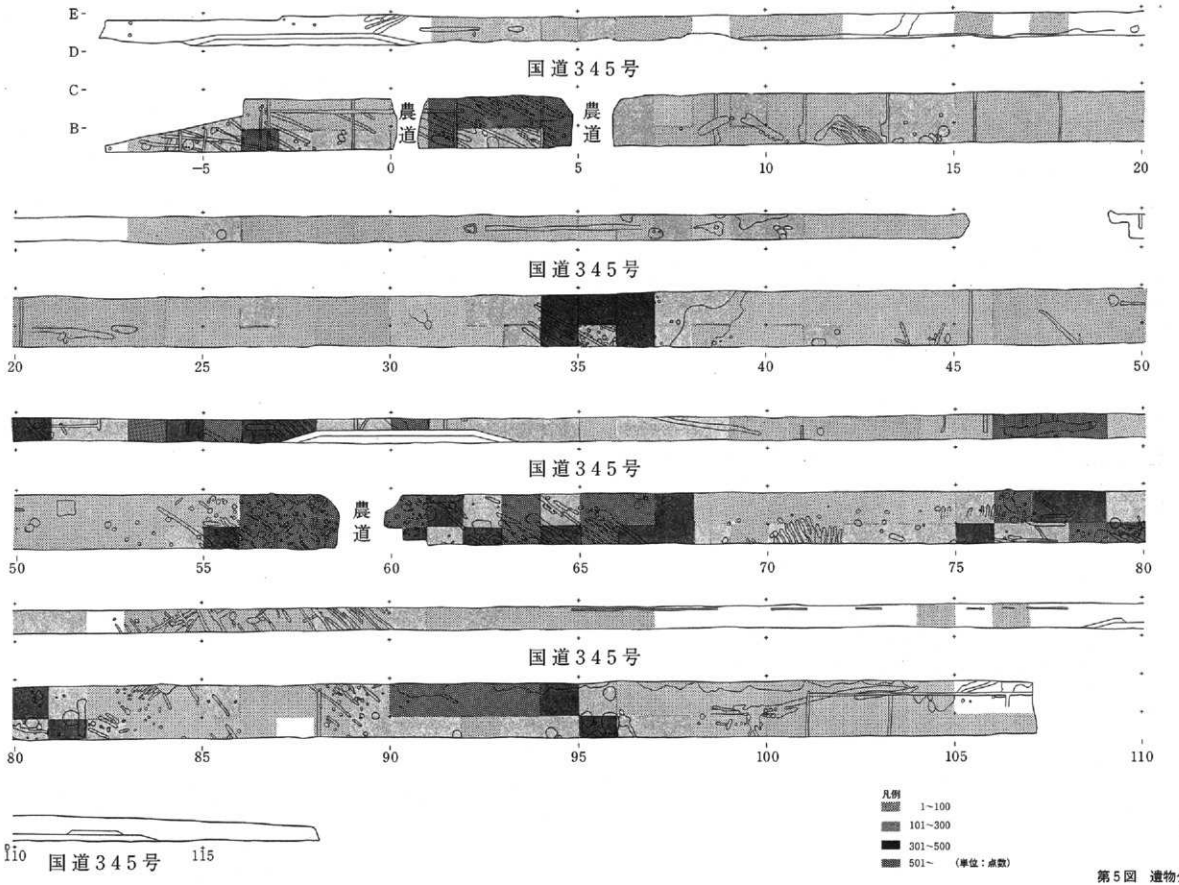
遺物は、種別では土製品・木製品・金属製品が、その中で主体となる土器は土器師・黒色土器・須恵器・赤焼土器・製塩土器が出土し、その器形は坏・蓋・甕・壺・瓶などがある。包含層（Ⅲ層）から破片数で40,650点、遺構内からは10,707点が出土した。第５図においてその出土状況を遺構配置図と併せて表示した。包含層から出土した遺物の70％は赤焼土器で、次いで須恵器が15％をしめる。器形別では、坏が全体の51％をしめる。それらは、第５図からも分かるように、遺構の密集する区域での出土量が多い。また、１次・２次調査でも出土した製塩土器も多数出土し、ＳＫ648からは破片数で1,553点が出土している。


基本層序A
(A−78)
5.80m
Ⅰ−a
Ⅱ−a
Ⅲ−a
Ⅳ−a
基本層序　A−78
Ⅰ−a　10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト（耕作土）
Ⅱ−a　10YR 3/3　暗褐色シルト
Ⅲ−a　10YR 3/1　黒褐色シルト
Ⅳ−a　10YR 5/3　にぶい黄褐色細砂質シルト
1　10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト（10YR 5/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
2　10YR 3/4　暗褐色粘質シルト（10YR 5/2　灰黄褐色粘砂質シルトがまだら状に混入）
3　7.5YR 4/2　灰褐色粘土
4　10YR 3/2　黒褐色粘質シルト（10YR 4/2　にぶい黄褐色シルトが粒状に混入）
基本層序B
(D−2)
5.40m
Ⅰ−b
Ⅱ−b
Ⅲ−b
Ⅳ−b
基本層序　D−2
Ⅰ−b　10YR 3/3　暗褐色微砂粘質シルト（耕作土）
Ⅱ−b　10YR 4/3　にぶい黄褐色砂礫土（縄文期をふくむ）
Ⅲ−b　10YR 4/2　灰黄褐色微砂粘質土
Ⅳ−b　10YR 5/3　にぶい黄褐色微砂粘質シルト
基本層序C
(D−52)
6.10m
Ⅰ−c
Ⅰ'−c
Ⅱ−c
Ⅲ−c
Ⅳ−c
S
基本層序　D−52
Ⅰ−c　10YR 3/4　暗褐色シルト（耕作土）
Ⅰ'−c　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂質シルト
（10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト、10YR 4/6　褐色シルトがまだら状に混入）
Ⅱ−c　10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト
Ⅲ−c　10YR 3/3　暗褐色シルト（遺物包含層）
Ⅳ−c　10YR 5/4　にぶい黄褐色シルト
基本層序D
(D−100)
6.70m
Ⅰ−c
Ⅰ'−d
Ⅱ−c
Ⅲ−c
Ⅳ−c
基本層序　D−100
Ⅰ−c　10YR 3/4　暗褐色シルト（耕作土）
Ⅰ'−d　10YR 5/3　にぶい黄褐色砂質シルト
（10YR 4/2　灰黄褐色砂質シルト、10YR 6/3　にぶい黄橙色砂質シルトがまだら状に混入）
Ⅱ−c　10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト
Ⅲ−c　10YR 3/3　暗褐色シルト（遺物包含層）
Ⅳ−c　10YR 5/4　にぶい黄褐色シルト
0
1m
1：40

第３図　基本層序



第４図　遺構配置図（Ｓ＝１：４００）



第5図　遺物分布図（S＝1：500）

Ⅳ　検出された遺構

今回の調査で検出された遺構のうち、登録したものは、掘立柱建物跡２棟、溝跡237条、土坑145基、河川跡２条、ピット202基、性格不明遺構17基を数える。以下、国道を挟んで西側と東側に分けて、主な遺構について概述していく。(第４・５図)

西側のＡ・Ｂ・Ｃ区では、Ａ～Ｂ－－７～５Ｇ・35Ｇ・65Ｇ・71Ｇ・75Ｇの各付近に、一定方向に伸びる溝状遺構群が検出された。これらは概ね南北に走るが、若干東に傾くものもあるため走行方向の違いから、少なくとも３時期にわたる変遷が窺える。37～38Ｇでは調査区を横切る形で、河川跡と思われるＳＧ10が検出されている。しかし東側の同Ｇ付近は、道路建設時の攪乱部に当たったため、遺構の延伸状況は確認できなかった。２棟の掘立柱建物跡は、遺構が密に分布するＢ区南端域で検出された。同区域ではＳＫ250やＳＤ231などから多くの遺物が出土している。東側のＤ・Ｅ区では、Ｄ-76～78Ｇに河川跡が見つかり、多数の墨書土器を含む、須恵器を主体とした土器が多量に出土した。溝状遺構群は82～89Ｇで検出された。

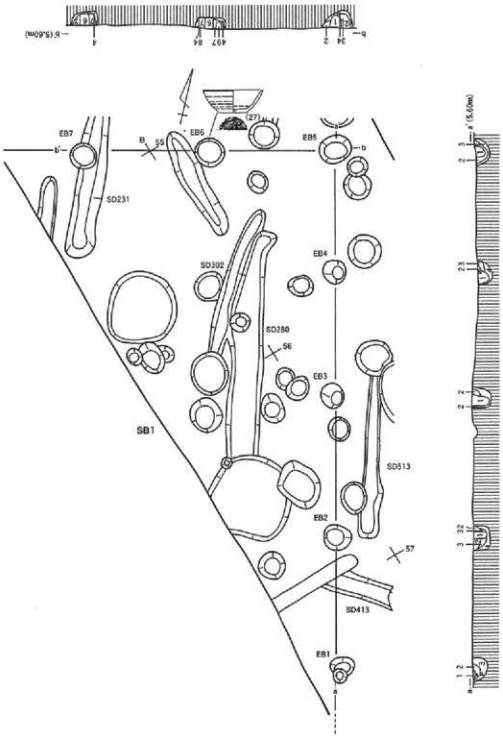
遺構は前述の通り４区域にまとまった分布を見せているが、15～33Ｇについては遺構がほとんど確認されていない。ここは他区域に比べ、包含層からの遺物の出土量も極めて少ない。またこの部分を境にして、遺物の様相に違いが認められる。詳細は後述するが、隣接する第２次の調査区においても同様の結果が得られていることから、当該域が遺跡範囲の境界になる可能性も考えられる。

１　掘立柱建物跡

今回の調査では２棟の掘立柱建物跡が検出された。しかし、どちらも建物跡の南側部分が調査区外に延びるため全形は明らかでない。柱穴全体では、赤焼土器と製塩土器の小片が合わせて150点余り出土している。ただ１点だけ図示できたＳＢ１－ＥＢ６出土の赤焼土器坏(27)は、建物の時期を考える上で重要な資料となる。柱穴の覆土は概ね砂質で、火山灰の堆積は認められない。第２次調査の３トレンチで検出されたＳＢ２建物跡と今回のＳＢ２は、主軸方向と柱間が同等ではあるが、柱穴の位置関係から観て、むしろＳＢ１とつながる可能性が有り得る。同一建物跡と仮定すると、桁行５間、梁行４間、南廂の南北棟になる。

ＳＢ１掘立柱建物跡（第６図，図版３）　Ｂ区南端域のＡ・Ｂ-54～57Ｇに位置する。桁行４間以上、梁行２間以上の南北棟で、主軸方向はＮ－14°－Ｗである。柱間は、１尺を30.3㎝とすると、桁行梁行ともに９尺で近似することから、９尺等間と考えることができる。柱穴の掘り方は径40～60㎝の円形を呈し、検出面からの深さは22～40㎝を測る。７個の柱穴でアタリが認められる。赤焼土器坏片(27)の底部外面に墨痕が見られるが、伴読不能である。

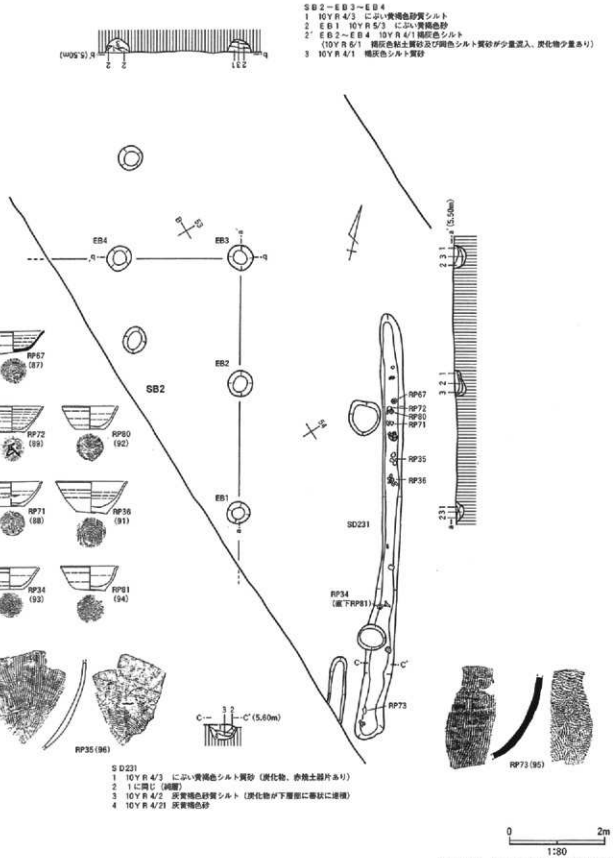
ＳＢ２掘立柱建物跡（第７図，図版４）　Ｂ区南端域のＡ・Ｂ-52～54Ｇに位置する。桁行２間以上、梁行１間以上の南北棟と考えられる。検出できたのは、建物跡北東隅の４柱穴のみであったため規模の把握は難しい。主軸方向はＮ－12°－Ｗである。柱穴の掘り方は径50㎝の円形で、検出面からの深さは15～30㎝を測る。柱間は、桁行梁行とも９尺と推定する。



ＳＢ１－ＥＢ１－ＥＢ７
1　10ＹＲ 2/2　黒褐色砂質シルト（炭化物あり）
2　10ＹＲ 3/2　黒褐色砂質シルト（10ＹＲ 5/2　灰黄褐色シルト質砂がまだら状に混入）
3　10ＹＲ 5/2　灰黄褐色シルト（黒褐色砂質シルトが少量混入）
4　10ＹＲ 4/2　灰黄褐色シルト質砂（黄色砂が混在、炭化物あり）
5　10ＹＲ 4/2　灰黄褐色シルト（10ＹＲ 4/3　にぶい黄褐色砂質シルトと10ＹＲ 4/2　灰黄褐色砂質シルトが混入、炭化物あり）
6　10ＹＲ 4/2　灰黄褐色砂質シルト（炭化物多量に混入）
7　10ＹＲ 3/3　褐褐色シルト質砂

0　2m
1：80

第６図　ＳＢ１掘立柱建物跡



第７図　ＳＢ２掘立柱建物跡

2　土坑

土坑は145基登録した。その中でまとまった遺物を出土した土坑の多くは溝状遺構群と重複関係を持っている。以下、遺物がまとまって出土した土坑や、特徴ある土坑についてその概略を述べる。

ＳＫ81（第８図）Ａ-78～79Ｇに位置し、ＳＤ48を切っている。西側は調査区外へ拡がる様相を呈している。長径197㎝、短径114㎝、深さ13㎝を測る。覆土は４層からなり、最上層からは炭化粒とともに須恵器片、赤焼土器が出土している。また、Ｆ４からは須恵器坏（34・35）が出土している。

ＳＫ250（第８図）Ａ-56Ｇに位置する。溝状遺構群を切る掘立柱建物跡とともに検出された。平面形態は円形で長径は190㎝、深さ16㎝を測り、東方をＳＰ541に切られる。覆土は４層からなり、Ｆ１からは炭化粒とともに、赤焼土器坏(46)～(54)が出土している。この他にも、須恵器片、赤焼土器片、黒色土器片、製塩土器片など破片数で373点が出土しているが、その91％は赤焼土器片である。

ＳＫ74（第８図）Ｂ-74Ｇに位置し、平面形態は楕円形を呈する。長径100㎝、短径68㎝、深さ30㎝を測る。覆土は６層からなる。検出面には長径20㎝ほどの焼成を受けた礫があり、その直下から出土した黒色土器坏(32)と赤焼土器坏(33)を図示した。赤焼土器坏(33)は口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使われたものと考えられる。

ＳＫ108（第８図）Ａ-94Ｇに位置し、西側は調査区外へ拡がる様相を呈している。長径118㎝、短径108㎝を測り、覆土は９層からなる。Ｆ１～Ｆ４にかけては、須恵器片や赤焼土器片など計38点が出土している。Ｆ４～Ｆ６には砂層があり、Ｆ９は人為的に埋められた粘土層であった。Ｆ８からは底部外面に「高」の文字が記されている赤焼土器坏(38)、Ｆ９からは赤焼土器坏(41)、甕(40)、須恵器高台皿(39)が出土している。その他、判読不明であったが覆土内より墨書土器片(271)・(306)も出土している。(39)は転用硯である。ＳＫ108は一度人為的に埋土した後砂層が入ったものと考えられる。

ＳＫ527（第８図）Ａ--６Ｇに位置し、溝状遺構群のＡ区画と重複関係を持っている。平面形態は円形で、長径145㎝、短径138㎝を測る。ＳＤ523を切り、ＳＤ526に切られる。覆土は４層からなり、Ｆ５・Ｆ６は柱穴である。赤焼土器片35点、須恵器片５点、黒色土器片６点、製塩土器１点がＦ３を中心として出土している。

ＳＫ30（第９図）Ｂ-63Ｇに位置する。溝状遺構群のＥ区画と重複し、ＳＤ32に切られる。直径150㎝前後の円形の土坑である。深さは23㎝程度であり、覆土は３層からなる。Ｆ１から赤焼土器の小破片が多数出土している。遺構検出面より出土した赤焼土器(15)、Ｆ１から出土した須恵器高台付坏(29)、赤焼土器坏(30)、(31)を図示した。

ＳＫ409（第９図）Ｂ-65Ｇに位置する。南北215㎝、東西100㎝の南北に長い土坑である。深さは15㎝前後である。溝状遺構群のＥ区画と重複関係にあり、ＳＤ44を切りながら、同溝と同じ方向にのびる。須恵器片３点、赤焼土器片42点、製塩土器片８点が出土しているが、図示できたものはＦ１から出土した赤焼土器坏(64)１点のみである。

ＳＫ457・458・459・ＳＤ460（第９図）Ｂ-56～57Ｇにかけて検出された。溝状遺構群のＤ区画と重複関係を持ち、南西脇にＳＢ１が検出されている。ＳＫ458は南方をＳＫ457に切られ、西方はＳＤ460を切っている。ＳＫ459は南方でＳＤ460を切っている。赤焼土器片を中心に小破片が多数出土している。ＳＫ457は直径130㎝前後の円形の土坑である。深さは28㎝を測り、Ｆ１・Ｆ２は土器片や炭化粒を含んでいる。ＳＫ458は不定形で、北方は国道345号の下へと拡がる様相を呈している。深さは、22㎝前後を測る。灰色の火山灰がＦ６に拡がっている。この火山灰層は庄内一円で検出されている十和田ａとみられる。ＳＫ459は長径160㎝、短径136㎝の略円形で、深さは15㎝を測る。Ｆ１は赤焼土器片を含んでいる。ＳＤ460は東西方向にのびる溝である。灰釉陶器片３点(99)～(101)が出土していることが注目される。このＳＤ460を廃棄した後にＳＫ457～459を作ったものと考えられる。

ＳＫ82（第９図）Ａ-79Ｇに位置する。直径145㎝前後の円形の土坑である。深さは22㎝を測り、覆土は４層からなる。北西方向にのびるＳＤ48を切っている。須恵器片４点、赤焼土器片19点、製塩土器片１点が出土している。赤焼土器高台付坏(36)を図示した。

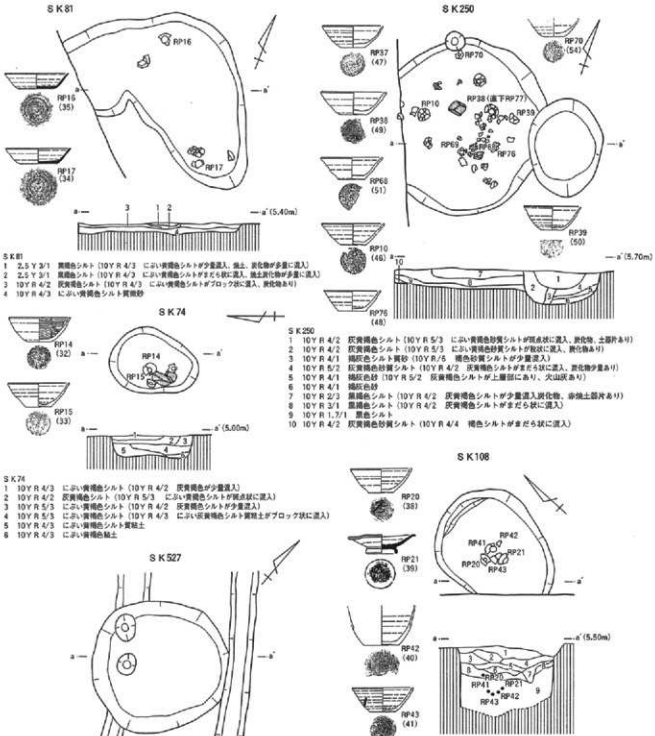
ＳＫ601（第10図）Ｄ-25Ｇに位置する。直径120㎝前後の円形の土坑である。Ｆ１上面より、文字は不明であるが底部に墨痕のある須恵器片(71)、転用硯とみられる須恵器蓋(70)、「有」の墨書を底部に持つ赤焼土器坏(74)が出土している。覆土は２層からなり、深さは15㎝前後を測る。Ｆ１より赤焼土器小壺(75)、赤焼土器坏(73)が出土している。

ＳＫ378（第10図）Ｂ-76Ｇに位置する。東方は調査区外に係るため全体を把握することはできなかったが、長軸365㎝以上、短軸162㎝の規模を有する不定形の大型土坑である。覆土は３層からなりＦ１上面より一括廃棄したと考えられる須恵器甕(60)、赤焼土器甕(57～59)、赤焼土器坏(56・61)がまとまって出土している。

ＳＫ630・631（第10図）Ｄ-50Ｇに位置する。ＳＫ630がＳＫ631を切っている。ＳＫ630は楕円形の土坑で、長軸154㎝、短軸50㎝前後を測る。Ｆ１には焼土が含まれている。ＳＫ631は、長径95㎝を測る楕円形の土坑である。Ｆ２を中心に破片集計で須恵器片２点、黒色土器片３点、赤焼土器片98点、製塩土器片１点が出土している。ＳＫ630・ＳＫ631の東側には第１次調査で検出された畝上構跡のＣ区画が広がっており、この溝状遺構群と重複する土坑かと思われる。

ＳＫ89（第10図）Ａ-81Ｇに位置する。南東方向は撹乱を受けているが、直径205㎝前後の規模を有する円形の土坑である。深さは12㎝を測る。覆土は５層からなり、Ｆ１は炭化物を含んでいる。また、その上面からは黒色土器高台付坏(37)が出土している。出土総数は破片集計で須恵器片18点、黒色土器片５点、赤焼土器片113点、製塩土器片２点にのぼる。

ＳＫ643（第10図）Ｄ-60Ｇに位置する。南半は撹乱を受け、北半は調査区外に係るため全形を確認することができなかった。覆土は６層からなり、深さは26㎝を測る。Ｆ３には炭化物が含まれ、Ｆ４は黒色の炭化層とみられる。出土遺物は小破片のみで図示するには至らなかったが、須恵器片５点、赤焼土器片221点、黒色土器片13点、製塩土器片８点と赤焼土器片を中心に多量の遺物が出土している。



SK81
1　2.5Y 3/1　黒褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルトが少量混入、焼土、炭化物が多量に混入）
2　2.5Y 3/1　黒褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入、焼土炭化物が多量に混入）
3　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入、炭化物あり）
4　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト質砂砂

SK250
1　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色砂質シルトが斑点状に混入、炭化物、土器片あり）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色砂質シルトが粒状に混入、炭化物あり）
3　10Y R 4/1　褐灰色シルト質砂（10Y R/6　褐色砂質シルトが少量混入）
4　10Y R 5/2　灰黄褐色砂質シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトがまだら状に混入、炭化物少量あり）
5　10Y R 4/1　褐灰色砂（10Y R 5/2　灰黄褐色シルトが上層部にあり、火山灰あり）
6　10Y R 4/1　褐灰色砂
7　10Y R 2/2　黒褐色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトが少量混入炭化物、赤焼土器片あり）
8　10Y R 2/1　黒褐色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトがまだら状に混入）
9　10Y R 1.7/1　黒色シルト
10　10Y R 4/2　灰黄褐色砂質シルト（10Y R 4/4　褐色シルトがまだら状に混入）

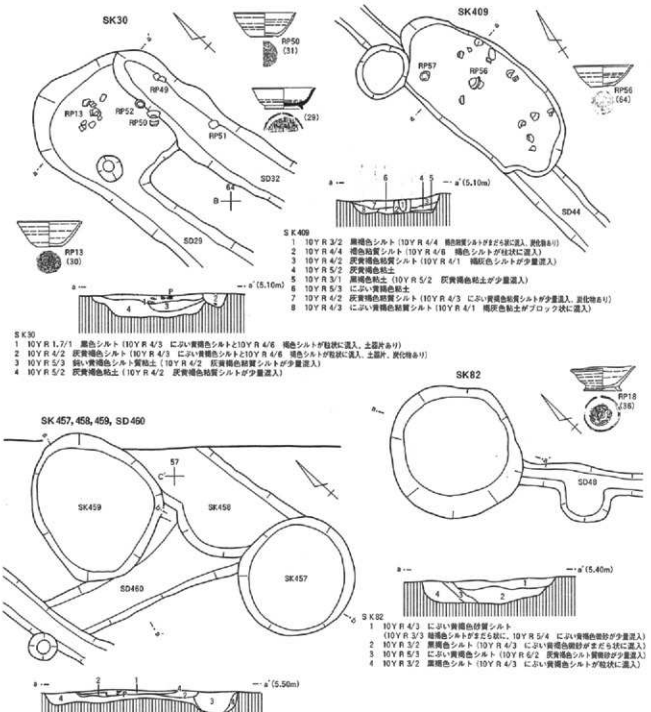
SK74
1　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色が少量混入）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルトが斑点状に混入）
3　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトが少量混入）
4　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい灰黄褐色シルト質粘土がブロック状に混入）
5　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト質粘土
6　10Y R 4/3　にぶい黄褐色粘土

SK527
1　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 2/1　黒色シルトが少量混入、炭化物あり）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
3　10Y R 2/1　黒色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトが少量混入、赤焼片、炭化物あり）
4　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト
5　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 2/2　黒色シルトが少量混入、炭化物あり）
6　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/4　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）

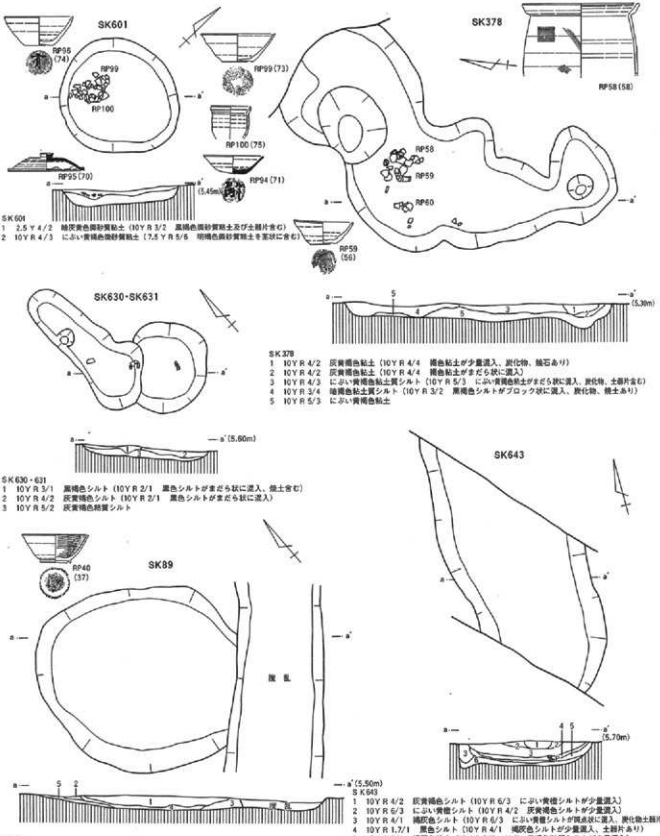
SK108
1　10Y R 3/3　暗褐色砂質シルト
2　10Y R 3/2　黒褐色砂質シルト
3　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト質砂（10Y R 5/3　にぶい黄褐色質砂がまだら状に混入）
4　10Y R 4/3　にぶい黄褐色砂
5　10Y R 4/2　灰黄褐色砂（10Y R 4/6　褐色砂がまだら状に混入）
6　10Y R 4/2　灰黄褐色砂（10Y R 4/6　褐色砂が粒状に混入）
7　10Y R 4/6　褐色粘質シルト
8　10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘土

0　1m
1:40

第8図　土坑(1)


SK30
RP50 (31)
RP49
RP13
RP52
RP50
RP51
(29)
SD32
B
RP13 (30)
SD29
a — — a'(5.10m)
SK409
RP57
RP56
RP56 (64)
SD44
a — — a'(5.10m)
SK30
1 10YR 1.7/1 黒色シルト (10YR 4/3 にぶい黄橙色シルトと10YR 4/6 褐色シルトが粒状に混入、土器片あり)
2 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (10YR 4/3 にぶい黄橙色シルトと10YR 4/6 褐色シルトが粒状に混入、土器片、炭化物あり)
3 10YR 5/3 鈍い黄橙色シルト質粘土 (10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルトが少量混入)
4 10YR 5/2 灰黄褐色粘土 (10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルトが少量混入)
SK409
1 10YR 3/2 黒褐色シルト (10YR 4/4 黄色粘質シルトがまだら状に混入、炭化物あり)
2 10YR 4/4 褐色粘質シルト (10YR 4/6 褐色シルトが粒状に混入)
3 10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルト (10YR 4/1 褐灰色シルトが少量混入)
4 10YR 5/2 灰黄褐色粘土
5 10YR 5/1 黒褐色粘土 (10YR 5/2 灰黄褐色粘土が少量混入)
6 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土
7 10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入、炭化物あり)
8 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルト (10YR 4/1 褐灰色粘土がブロック状に混入)
SK 457, 458, 459, SD 460
SK459
SK458
SK457
SD460
a — — a'(5.50m)
b — — b'(5.50m)
SK459・SD460
1 10YR 2/1 黒色シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが少量混入)
2 10YR 4/2 灰黄褐色シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが斑点状に混入、炭化物あり)
3 10YR 4/2 灰黄褐色砂質シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトが斑点状に混入、炭化物あり)
4 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
SK82
RP18 (38)
SD49
a — — a'(5.40m)
SK 82
1 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR 3/3 暗褐色シルトがまだら状に、10YR 5/4 にぶい黄橙色砂が少量混入)
2 10YR 3/2 黒褐色シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入)
3 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト (10YR 6/2 灰黄褐色シルト質砂が少量混入)
4 10YR 3/2 黒褐色シルト (10YR 4/3 にぶい黄褐色シルトが粒状に混入)
SK 457・SK 458
1 10YR 3/2 黒褐色粘質シルト (10YR 7/2 にぶい黄橙砂粘質シルト粒及び炭化粒、土器片含む)
2 10YR 3/3 暗褐色粘質シルト (10YR 7/2 にぶい黄橙砂粘質シルト粒及び炭化粒、土器片含む)
3 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR 7/2 にぶい黄橙砂質シルト粒及び炭化粒少量含む)
4 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR 7/2 にぶい黄橙砂質シルト少量含む)
5 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂質シルト (10YR 7/2 にぶい黄色粘土粒砂質シルト粒含む)
6 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂質シルト (2.5 Y R 5/6 明赤褐色砂質シルト粒及び炭化粒と土器片含む)
7 7.5 Y R 3/1 黒褐色粘質シルト (10YR 7/2 にぶい黄橙砂粘質シルト粒及び炭化粒と土器片含む)
8 10YR 4/4 褐色粘質シルト (10YR 7/3 にぶい黄橙砂質シルト粒及び炭化粒と土器片含む)
9 10YR 3/4 暗褐色粘質シルト (10YR 8/1 黄色火山灰12cm×2cm層を含む)
0 1m
1:40

第９図 土坑(2)


SK601
RP96 (74)
RP99
RP100
RP99 (73)
RP100 (75)
RP95 (70)
RP94 (71)
(5.45m)
SK601
1　2.5Y 4/3　暗灰黄色微砂質粘土（10Y R 3/2　黒褐色微砂質粘土及び土器片含む）
2　10Y R 4/3　にぶい黄褐色微砂質粘土（7.5 Y R 5/6　明褐色微砂質粘土を茎状に含む）
SK378
RP58 (58)
RP58
RP59
RP60
RP59 (56)
(5.30m)
SK378
1　10Y R 4/2　灰黄褐色粘土（10Y R 4/4　褐色粘土が少量混入、炭化物、礫石あり）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色粘土（10Y R 4/4　褐色粘土がまだら状に混入）
3　10Y R 4/3　にぶい黄褐色粘土質シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘土がまだら状に混入、炭化物、土器片含む）
4　10Y R 3/4　暗褐色粘土質シルト（10Y R 3/2　黒褐色シルトがブロック状に混入、炭化物、礫土あり）
5　10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘土
SK630・SK631
(5.60m)
SK630・631
1　10Y R 3/1　黒褐色シルト（10Y R 2/1　黒色シルトがまだら状に混入、焼土含む）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 2/1　黒色シルトがまだら状に混入）
3　10Y R 5/2　灰黄褐色粘質シルト
SK643
(5.70m)
RP40 (37)
SK89
撹乱
(5.50m)
SK89
1　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 6/3　にぶい黄橙質砂が少量混入、赤粘片、炭化物あり）
2　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 5/4　にぶい黄褐色シルト質砂が少量混入）
3　10Y R 5/4　にぶい黄褐色砂
4　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
5　10Y R 5/4　にぶい黄褐色シルト質砂
SK643
1　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト（10Y R 6/3　にぶい黄橙シルトが少量混入）
2　10Y R 6/3　にぶい黄橙シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトが少量混入）
3　10Y R 4/1　褐灰色シルト（10Y R 6/3　にぶい黄橙シルトが斑点状に混入、炭化物土器片含む）
4　10Y R 1.7/1　黒色シルト（10Y R 4/1　褐灰色シルトが少量混入、土器片あり）
5　10Y R 5/1　褐灰色粘土（10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入）
6　10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘質シルト
0　2m
1：40

第10図　土坑(3)

3　溝状遺構群

今回検出された畑の畝跡と考えられる溝跡は７区画より構成されている。

Ａ区画(第11図)　Ａ～Ｃ－－７～２Ｇにかけて位置している。南北50㎝以上にわたって広がる。－７～５Ｇにかけてみた場合４時期の変遷が認められる。第１期はＳＤ518～522・524の南北方向に走行する溝跡で構成され、長さ600㎝前後、幅30㎝、深さ10㎝前後の溝跡が100㎝前後の間隔で整然と配置されている。第２期はＳＤ535・537により構成される東西方向の溝跡である。長さは確定できないが、深さは８㎝前後を測る。第３期は第１期より13度西に傾くＳＤ523・526により構成される。長さは15ｍ以上になる。第４期は第２期より７度西に傾く溝跡で、ＳＤ529・530により構成される。

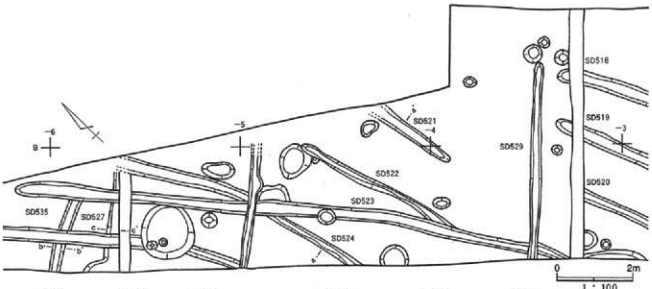
Ｃ区画(第14図)　Ａ～Ｃ－33～37Ｇにかけて位置し、２時期の変遷が認められる。第１期はＳＤ205～208・500・212・495・496などにより構成される溝跡群で、南北方向から西に13度の傾きがある。第２期はＳＤ494のみの検出であったが、第１期のものより40度東に傾く。また、この区域の南東方向にＳＧ10が検出され、建物跡を検出するには至らなかったが、柱穴群との重複関係も認められる。

Ｄ区画　Ａ～Ｅ－54～58にかけて位置する。この区域には、前述したＳＢ１・２が検出されている。溝跡群との切り合いから、溝状遺構群を廃棄した後に居住区域としたものと推定される。Ｂ調査区に位置するＳＤ231・280・513・461、Ｅ調査区に位置するＳＤ634～641により構成される第１期と、ＳＤ413・460などにより構成される第２期があると推定される。また、ＳＤ231からは、赤焼土器坏(88～94)を含む多量の遺物が出土している。

Ｅ区画(第12図)　Ａ～Ｂ－62～67Ｇにかけて位置し、ＳＤ27～29・32・36・41～44・47～48・363～365・133等の溝跡により構成される。方位はＮ－６°－Ｗを測るが、長さは100～450㎝以上と不規則的である。また、溝と溝の間隔も10～60㎝と不規則的である。幅18㎝前後、深さ10㎝前後を測る。ＳＤ29・32はＳＫ30と、ＳＤ44はＳＫ409というように遺物を多く含んでいる土坑と重複関係を持つものもある。

Ｆ区画(第12図)　Ａ～Ｂ－70～72Ｇにかけて位置している。ＳＤ60～66・68・69のＡ類と、ＳＤ70～73のＢ類との２時期があると考えられるが、切り合いが確認できるところがなく変遷順は不明である。Ａ類は北から東側に15度傾く。長さ100～400㎝以上、幅40㎝前後、深さ10～15㎝を測る。溝と溝との間隔は20㎝前後で、規則的に走行している。Ｂ類はＡ類よりさらに27度東方に傾き、Ａ類と同様20㎝間隔で規則的に走行している。長さ230㎝以上、幅40～45㎝、深さ15㎝前後を測る。

Ｇ区画(第13図)　国道345号をはさんでＡ～Ｅ－83～90Ｇにかけて位置する。溝状遺構群は３時期の変遷が認められる。第１期はＳＤ351～353・355・356などの南北に走行する溝跡である。西半部については国道の下まで続き本来の長さを確定することはできない。80～100㎝間隔で配されている。第２期はＳＤ421・420・418・386・659・660などの東西方向に走行する溝跡である。約20㎝間隔で配されている。第３期はＳＤ666・667・684・685などの南北方向の溝跡である。第１期の溝に比べ、18度東に傾く。

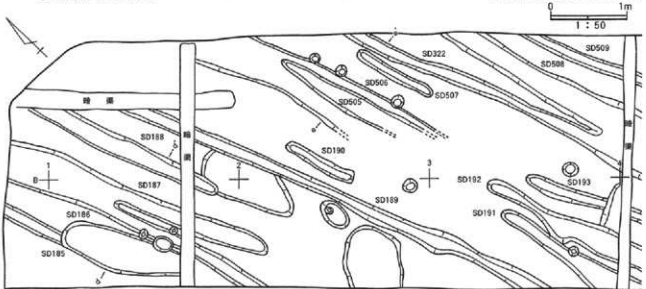


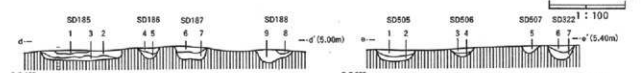
SD521～SD524
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR4/2　灰黄褐色シルト（10YR5/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
3　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト

SD535
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト

SD537
1　10YR4/2　灰黄褐色シルト
2　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト
（10YR4/2　灰黄褐色シルトがまだら状に混入）

0　1m
1 : 50



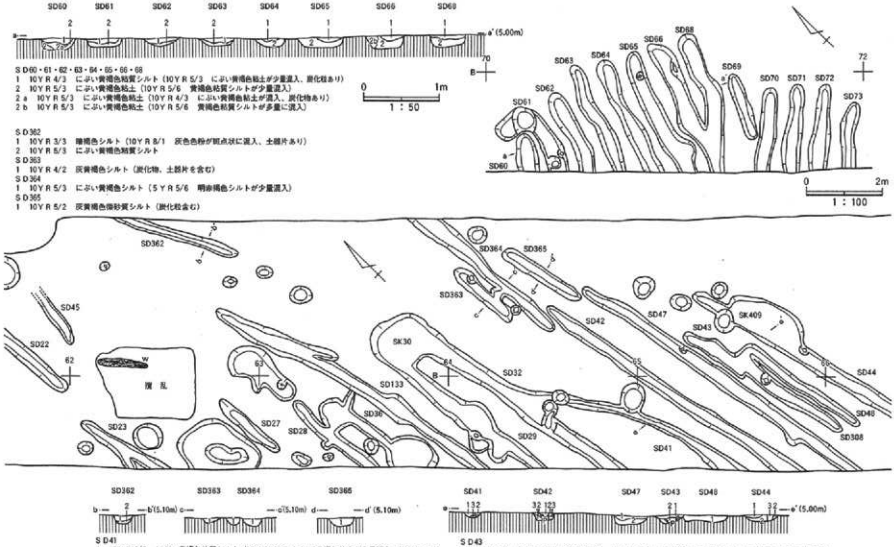


S D185
1　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト（炭化物少量あり）
2　10Y R 5/4　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
3　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト（黄色砂が混入）
S D186
4　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入）
5　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/2　灰黄褐色シルトが小ブロック状に混入）
S D187
6　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 5/2　灰黄褐色シルトがまだら状に混入、炭化物少量あり）
7　10Y R 5/2　灰黄褐色粘質シルト
S D188
8　10Y R 5/3　にぶい黄褐色シルト（10Y R 4/3　にぶい黄褐色粘質シルトが小ブロック状に混入）
9　10Y R 4/2　灰黄褐色粘質シルト

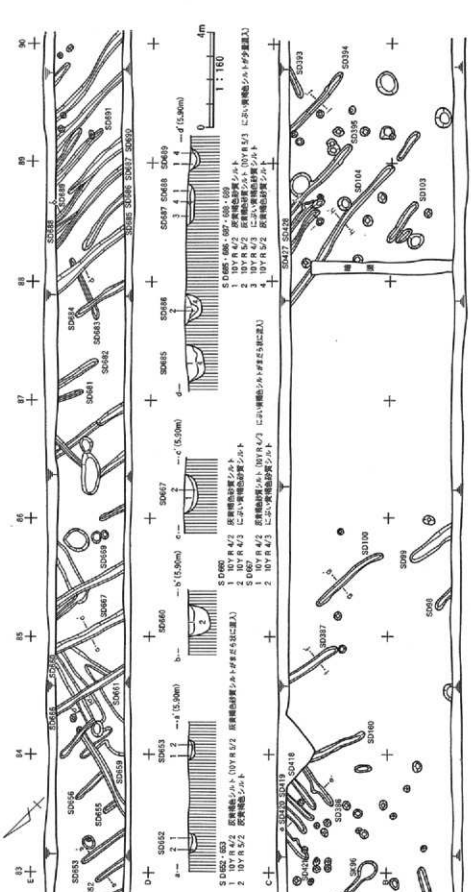
S D505
1　10Y R 3/2　黒褐色シルト（7.5Y R 4/6　褐色シルトがまだら状に混入）
2　10Y R 3/3　暗褐色シルト
S D506
3　10Y R 2/3　黒褐色シルト
4　10Y R 4/3　にぶい黄褐色シルト
S D507
5　10Y R 3/3　暗褐色シルト、7.5Y R 4/4、褐色シルトが縞状に混入
S D322
6　10Y R 4/2　灰黄褐色シルト
（10Y R 5/2　灰黄褐色砂質シルトが少量混入）
7　10Y R 5/2　灰黄褐色シルト質砂
（10Y R 5/3　にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入）

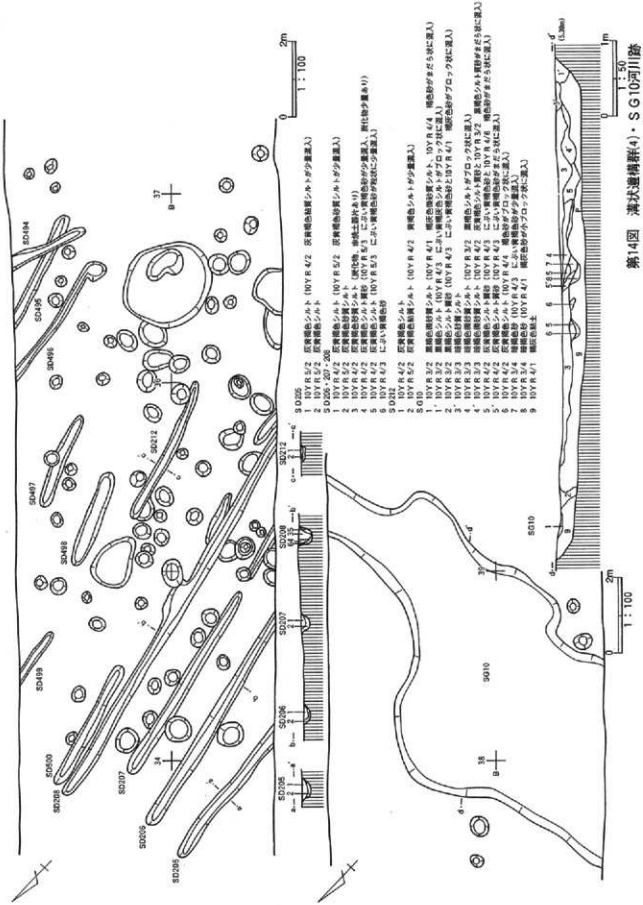
0　1m
1 : 50

第11図　溝状遺構群(1)


SD60 SD61 SD62 SD63 SD64 SD65 SD66 SD68
a' (5.00m)
SD60・61・62・63・64・65・66・68
1 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土が少量混入、炭化物あり）
2 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土（10YR 5/6 黄褐色粘質シルトが少量混入）
2a 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土（10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土が混入、炭化物あり）
2b 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土（10YR 5/6 黄褐色粘質シルトが多量に混入）
0 1m
1：50
SD68 SD69 SD70 SD71 SD72 SD73
SD63 SD64 SD65 SD66 SD62 SD61 SD60
0 2m
1：100
SD362
1 10YR 3/3 暗褐色シルト（10YR 8/1 灰色色粉が斑点状に混入、土器片あり）
2 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質シルト
SD363
1 10YR 4/2 灰黄褐色シルト（炭化物、土器片を含む）
SD364
1 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（5YR 5/6 明赤褐色シルトが少量混入）
SD365
1 10YR 5/2 灰黄褐色微砂質シルト（炭化粒含む）
SD362 SD364 SD365 SD363 SD45 SD22 SD23 SD27 SD28 SD30 SD133 SK30 SD32 SD29 SD41 SD42 SD47 SD43 SK409 SD44 SD46 SD308
撹乱
SD362 SD363 SD364 SD365
b' (5.10m)
c' (5.10m)
d' (5.10m)
SD41 SD42 SD47 SD43 SD46 SD44
e' (5.00m)
SD41
1 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土が少量混入、炭化物あり）
2 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（10YR 5/3 にぶい黄褐色シルトが小ブロック状に混入）
3 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土（10YR 5/6 黄褐色粘質シルトが少量混入）
SD42
1 10YR 3/3 暗褐色シルト
2 10YR 4/6 褐色シルト
3 10YR 4/2 灰黄褐色粘質シルト（10YR 5/3 にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入）
SD47
1 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入）
2 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
SD43
1 10YR 3/3 暗褐色シルト（10YR 4/2 灰黄褐色シルトがまだら状に、10YR 4/4 褐色シルトが斑状に混入）
2 10YR 2/1 黒色シルト
SD48
1 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR 4/2 灰黄褐色シルトが少量混入）
SD44
1 10YR 3/3 暗褐色シルト
2 10YR 3/3 暗褐色粘質シルト（10YR 4/3 にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入）
3 10YR 3/3 暗褐色粘質シルト（10YR 4/4 褐色シルトが少量混入）
0 1m
1：50

第12図 溝状遺構群(2)


1：160
1：40
4m
2m
SD420
SD419
SD418
SD396
SD387
SD190
SD104
SD427
SD428
SD394
SD393
SD395
SD100
SD099
SD098
SD097
SD096
SD095
SD094
SD093
SD092
SD091
SD090
SD089
SD088
SD087
SD086
SD085
SD084
SD083
SD082
SD081
SD080
SD079
SD078
SD077
SD076
SD075
SD074
SD073
SD072
SD071
SD070
SD069
SD068
SD067
SD066
SD065
SD064
SD063
SD062
SD061



第14図　溝状遺構群(4)・SG10河川跡

4　河川跡

ＳＧ702（第15図、図版９）

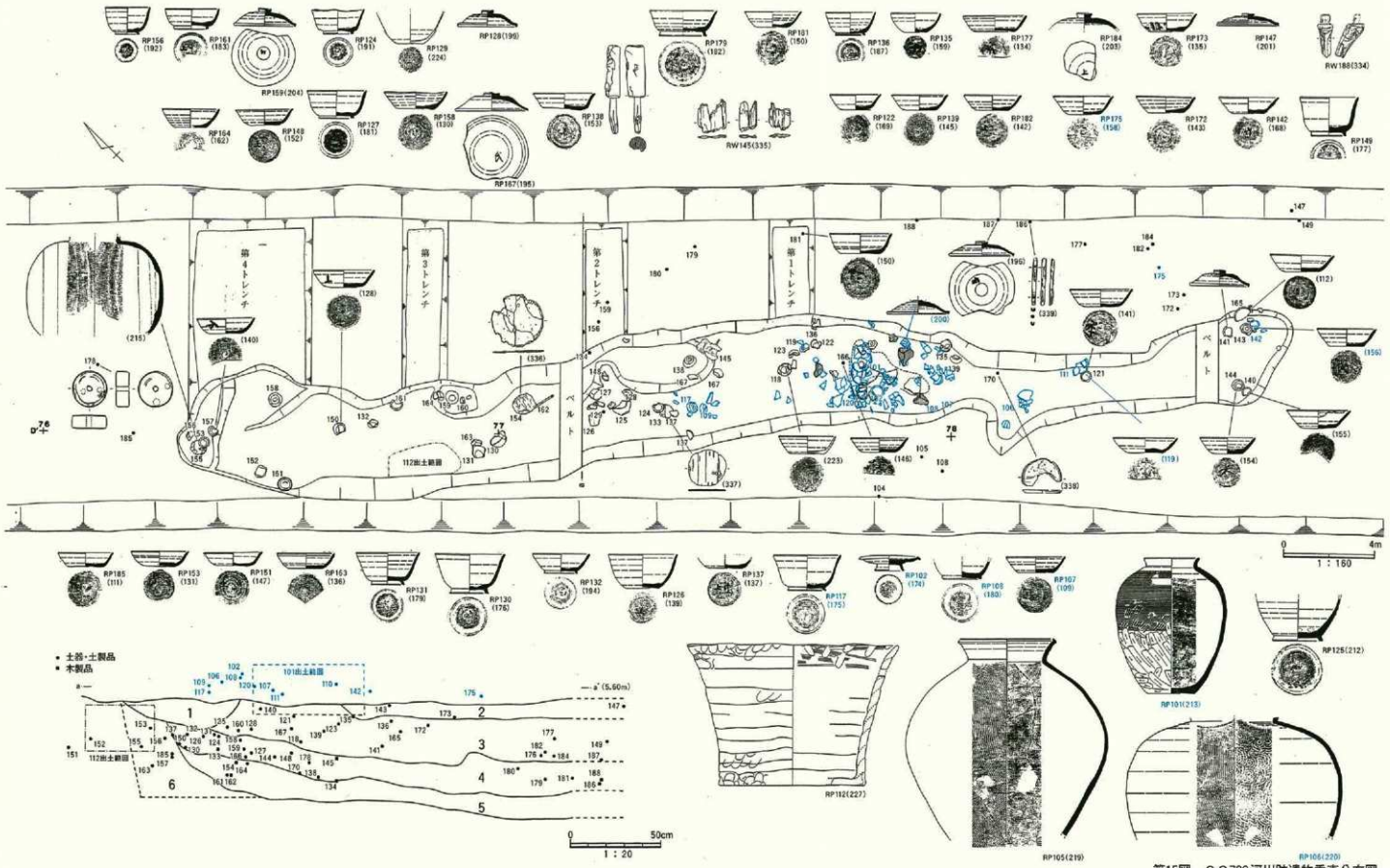
Ｅ区のＤ′-76～78Ｇにかけて確認された。覆土と地山の明確な区別が難しく、面整理段階で覆土と認識できた区域は、第15図に示した南北長約12ｍ、幅１ｍ余の溝状を呈した部分であった。しかし両岸の立ち上がりが確認されなかったため、幅50㎝のトレンチを４本設定し掘り下げた。第４トレンチは後に120㎝に拡幅したが、東岸および旧河川の規模は把握できなかった。一方、西岸は当初、Ｆ５の立ち上がりで、ＳＸ701性格不明遺構に切られていると思われた。しかし、Ｆ６からも須恵器を主体とした数点の土器が出土していることから、西岸の立ち上がりについても明確な判断ができなかった。ただ、現国道を挟んで西側のＡ区同グリッド付近においては、河川跡らしい区域は見つかっていない。よって、西岸は現国道の真下に当たる部分で捉えられる可能性が考えられる。

第２トレンチ北壁で土層観察を行った。川底はほぼ平坦に推移しており、確認面からの深さは50㎝前後、最深部で65㎝を測る。川底の地形や付近の標高などから見て、南から北へ向かって流れていたと考えられる。覆土は、下位のＦ５・６は砂の純層であることから、この河川が本来の機能を果たしていた時期の堆積層（Ⅰ）、中位のＦ４は粘性を帯びた砂質シルト層であることから、河川としての機能が低下していった時期の堆積層（Ⅱ）、上位のＦ２・３は下部の腐食土から上部の炭化物まで漸移している粘性を帯びたシルト層であることから、河川埋没期の堆積層（Ⅲ）の３つに大別される。Ⅰ層では、Ⅱ層との境目に近い上層部から何点かの遺物が出土しているものの、ほとんど遺物は見られない。Ⅱ・Ⅲ層は、河川の周辺に古代の集落が存在していた時期の堆積層と考えられ、須恵器坏を主として豊富な遺物の出土量を得た。その中で墨書が認められた土器は、破片を含めて62点あったが、そのうち32点がⅡ層から出土したものである。須恵器の坏・高台付坏に限っては、底部切り離しは回転ヘラ切りがほとんどで、回転糸切りのものは全体の２％ほどにすぎない。出土土器の詳細については後述に拠るが、第１次・第２次調査で捉えられていた、９世紀前葉から中葉代を中心とする土器群とは若干異なる様相を呈するものがあり、これまで可能性として指摘されていた８世紀後葉という年代観に、より近づく資料であると思われる。また、Ⅱ層最西部において、製塩土器の破片が1,553点出土している。これは製塩土器をまとめて廃棄した土坑と見られるが、現国道の路盤によって遮られ大きさ、深さとも確認できなかったため詳細は不明である。

この河川跡は位置関係から判断して、第１次調査で指摘していた、遺跡範囲の境界線より北東部にある旧河道の存在を明確にするものといえる。

ＳＧ10（第14図、図版９）

Ｂ区のＡ・Ｂ-37～39Ｇにかけて確認された。覆土の堆積状況を見ると、これは氾濫等で一時的に多量の水が流れた跡で、河川としての本来の機能は果たしていなかったと考えられるが、幾度かの氾濫時に水が流れたものと思われる。底面の地形から、西から東へ流れたことが窺える。覆土は腐食土で、炭化物、流木片、火山灰等が認められた。遺物は須恵器・赤焼土器の小片が若干出土している。深さ20～36㎝、幅360㎝を測る。



第15図　ＳＧ702河川跡遺物垂直分布図

Ⅴ　出土した遺物

本調査で出土した遺物は、包含層、遺構内をあわせて整理箱にして92箱を数える。点数にして51,357点が出土している。種別的には、土器・土製品・木製品・石製品・木製品・金属製品などであった。以下では、出土遺物の大半を占めた土器類を中心に種別器種ごとの概要を記していく。

1　土器

(1)　土師器・黒色土器

土師器には、坏・壷・小壷の器種が出土している。全てＳＧ702河川跡からの出土である。坏は３点である。(105)は底部から体部下端にかけてヘラ削りが施され、体部は緩やかに丸みを帯びながら立ち上がる。(139)は器高が高く74㎜を測り、深い碗上の形態をなす。底部は、回転糸切りの後ヘラ削りが施されている。内外面ともに酸化鉄を含む粘土により赤彩されており、底部には「上」の墨書がある。(223)は(139)と同様焼成がよく、内外面ともに赤彩されている。県内では類例として鶴岡市西谷地遺跡、遊佐町上高田遺跡、宮ノ下遺跡で出土している。(203)は壷である。内外面ともに赤彩されており、内面には「上」の墨書もある。(139)の壷と考えられる。小壷（106）は、下半部のみである。底部にはヘラによる調整痕が残る。

黒色土器は、内面に黒色処理を施した内黒土器のみの出土であった。出土遺物全体量の約４％と少量の出土である。図化したものは高台坏２点、坏２点、鉢１点の５点である。高台付坏は（１）と（37）である。（１）は包含層からの出土である。器高が低く皿形の器形で体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。(37)はＳＫ89からの出土である。回転糸切りの後高台が付され、体部は内弯ぎみに立ち上がり口唇部がわずかに外反する。坏は(32)・(86)の２点である。(32)はＳＫ74の覆土内からの出土である。器高が高く、体部はわずかに内弯しながら立ち上がる。(86)はＳＤ231の覆土内からの出土である。底部から体部下端にかけてヘラ削りが施され、体部はやや直線的に立ち上がる。器高が高く大振りなものである。(107)は鉢の体部のみである。ＳＧ702より出土している。内外面ともヘラミガキが不定方向に施されている。

(2)　須恵器

須恵器は調査区全域から出土しており、出土遺物全体量の約22％をしめる。特に、Ｅ区河川跡からの出土が多い。器種は坏・高台付坏・壷・壺・甕・横瓶・鳥形土器などがある。

壷は、その法量から、口径160㎜内外の大振りなもの(9・11・70・195)と、140㎜内外の小振りなもの(10・42・196・198・199・200・201・202・204・206)に大別され、それぞれに山笠型、平笠型とがある。(195)・(197)には「氏」、(196)には「古」の墨書がある。また(10)・(70)・(199)の内面には墨痕があり転用硯と考えられる。(207)は口径が70㎜と小さく長頸壺の蓋と考える。

高台付坏は22点を図化した。そのうち、20点はＳＸ701・ＳＧ702からの出土である。底部切り離しはすべて回転ヘラ切りである。形態と法量などから以下の５類に分類した。Ａ；大振り

で器高が高く、口径と底径との差が小さいもの(175～181)。B：口径と底径との差が小さく、Aに比して器高が低いもの（5・29・182～186)。(183)・(185)・(186)には「上」、(184)には「十万」の墨書が底部にある。C：器形はAと似るが、Aに比して小振りなもの。体部が内弯ぎみに立ち上がるもの（187・188・192)と、体部が直線的に立ち上がるもの(189～191)とがある。(187）の底部には墨痕が残っており、転用硯とみられる。D：稜埦（193)。稜埦は1点のみの出土である。体部下半にヘラ削りを施し明瞭な稜を形成している。体部上半は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。稜埦は周辺遺跡では吹浦遺跡で1点出土しているのみである。E：口径と底径との差が大きいもの(194)。高台形状、高台位置などにより細分が可能である。

高台付皿は2点図下した。量的には僅少である。2点ともに底部は回転ヘラ切りによる切り離しである。(39)は底部が硯として使用されている。

須恵器の中で主体をなす坏は78点を図化した。そのうち、65点はE区河川跡から出土したものである。ここでは、河川跡から出土したヘラ切り須恵器坏について分類する。

A：器高が40㎜以上と高く、体部の立ち上がりの角度が急なタイプ(120・149～151)。(150)は、底部外面に「比口」の墨書がある。

B：底部の作りが丸底風になるタイプ(121～123・125・129)。(122)・(123)は、底部から体部下半にかけて回転ヘラ削りが施されている。墨書「上」が見られるものがある。

C：器高が30㎜前後と低く、体部が直線的に開くタイプ（111・114～117・172)。

D：器高が30～40㎜内外で、体部が直線的に開くタイプ(108～110・112・154～158)。「氏」の墨書を持つものがある。

E：底径65～80㎜内外で、体部が緩やかに立ち上がるタイプ(130～132・134～138・160～166)。(136)は体部は緩やかに立ち上がり、口唇部は直立している。

F：底径が65～80㎜内外で、体部は緩やかに立ち上がり口唇部で外反するタイプ(141～148・168～171)。(141)の底部には、「八部」の墨書がある。

年代観については、A・Bが古く8世紀第4四半期に比定できる。また、(173)は9世紀第2四半期に比定できる回転糸切りの須恵器坏であり、この時期を上限としているものと推定される。

A・B・C区出土の須恵器坏は底部回転糸切りが主体をなし、上記の河川跡出土の土器よりも新しい一群である。

甕は、須恵器全体の約30％をしめるが、破片での出土のため全形を知り得るものは少なく、河川跡から出土したものを中心に図示した。河川跡から出土したものは大型品が多くみられる。底部形状まで知り得るものは少なかったが、(221)は丸底を呈する。

壺は7点図化した。長頸壺と短頸壺に類別できるが、破片のため全形を知り得るものは少ない。(210)は長頸壺の頸部である。(213)は短頸壺である。体部はタタキ成形の後上半部はカキメ状の調整、下半部はナデによる調整が伺える。(212)の底部は、回転ヘラ削り調整の後高台を付けている。体部の下端部もヘラ削りが施され、内側には指押痕がみられる。

注目すべきは、鳥形土器が2点出土していることである。鳥形土器は平成6年度に堂田遺跡から当地域で初見され、平成7年度の本遺跡調査でも出土している。(24)は破片1点のみで全

形を知り得ることはできないが、胸部の模様が確認できる。(214)はE区河川跡からの出土である。羽～腹の部分、腹の部分が出土している。羽の部分は条線で表され、羽と体部の区別に隆線を用いている。体部には、脚部が剥落した痕跡がみられる。堂田遺跡出土のものと同様に、胴部は球形に整形され、脚を張り付けたものとみられる。

(3) 赤焼土器

調査区の全域から出土し、その出土量は今次の調査で出土した遺物の中で最も多く、破片集計で約70％にのぼる。これは、1次・2次調査でも同様の傾向にあり、遺跡の性格をよく表している。器種は坏・高台付坏・甕・小壺が出土している。破片集計では、坏と甕が約半数ずつであり、高台付坏はごく僅少である。

高台付坏は3点を図化した。すべて底部は回転糸切りの後高台が付されている。(18)は器高が低く、皿状を呈する。(36)は歪みが大きい。

坏は赤焼土器の中では最も図示点数が多く50点を図示した。以下の3類に分類した。A類：底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる一群(13・14・17・21・33・43・46・49・51・56・61・66・73・77・83・85・89・92・93・102・103)。口径は概して120㎜内外の小振りなもの、130㎜内外のもの、160㎜内外の大振りなものの3種に分けられる。また、ロクロによる器面調整で肉厚になる稜を作り出しているものが多い。(33)・(83)は口唇部に油脂が付着しており灯明皿に使用したものと考えられる。(43)の底部には判読不明の墨書痕と、「×」のヘラ印痕がある。(89)の底部外面には「氏」の墨書が描かれている。B類：底部から口縁部にかけて丸みを帯びながら立ち上がる一群(16・27・38・41・67・68・74・76・82・88・90)。口径は120㎜内外のものと、130㎜内外のものとに分けられ、大振りなものはみられなかった。(27)には底部に、(41)には体部にそれぞれ判読不明の墨書痕がある。(38)の底部には墨書「高」(74)には「有」がそれぞれ底部に描かれている。(67)は器高が33㎜と低く、皿状を呈する。C類：底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり口唇部が外反する一群（15・28・30・31・47・48・50・52・63・64・79・91・94・98・104）。口径は120㎜内外の比較的小振りなもの、130・140㎜内外のもの、160㎜内外の大振りなものの4種に分けられる。(30)・(64)は口唇部内面に油脂が付着しており、灯明皿に利用したものと考えられる。

甕は破片での出土量が多く、全形を知り得る資料は少なかったが、口径を計測できたものについては大型と小型の甕があることがわかる。大型の甕は(58・59・65・81・96)で口径は200～276㎜を測る。口縁部は、「く」の字状に外反し口唇部が垂直に立っているものが多い。(65)は外面にハケメ痕が、(96)には内外面ともに平行タタキ痕が確認できる。いずれにも煮沸の痕跡を示す黒色の煤が付着している。小型の甕は(19・20・40・45・55・57・69・75・78・81・84)である。口径を計測できる資料は少なかったが、100～200㎜の範囲に入るものと思われる。底部は平底で、(19)・(20)・(84)は静止糸切りによる切り離しである。小型の甕も大型の甕同様煮沸の痕跡を示す黒色の煤が付着しているものが多い。

小壺は(75)・(83)の2点である。口径は83㎜・95㎜であり、口縁部はいずれも「く」の字状に外反する。

(4)　製塩土器

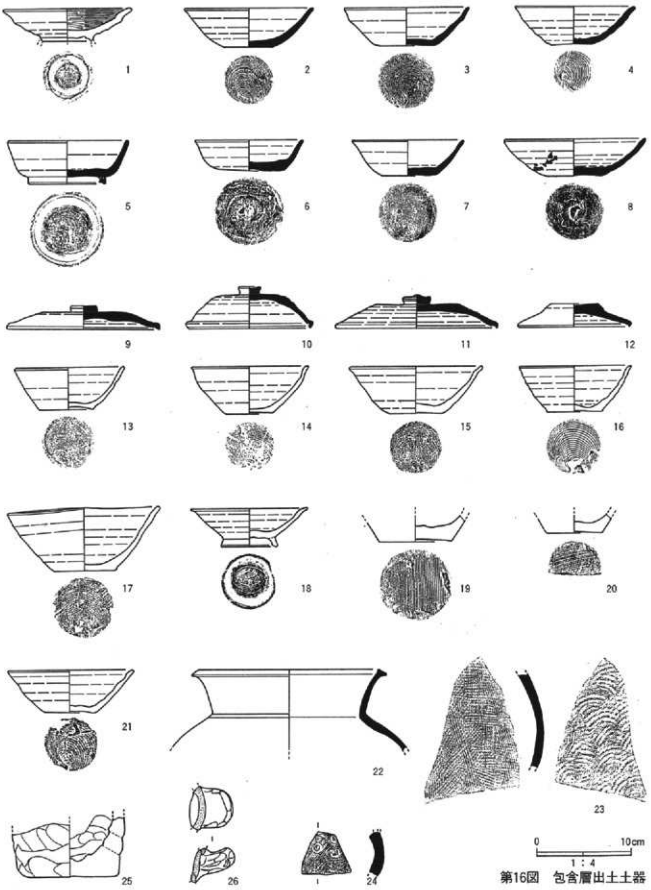
製塩土器は、調査区全域から出土しているがほとんどが小破片での出土であり、図化できたものは8点である。大型A類・B類と小型C類がある。(231)は筒状の支脚と考えられる。大型の製塩土器はバケツ状に開く深鉢形態をなす。口縁の形態で2種に分類できる。A類は底部から体部下半にかけては斜上方に立ち上がり、体部上半で外反するもの(227・228)。県内では、余目町千河原遺跡で出土している。口径は227が420㎜、228が520㎜を測る。円盤状の底部に粘土紐を輪積み状に巻き上げている。外面は輪積み痕が明瞭に残る。底部に指ナデ痕、口縁部に指ナデ痕とハケメ痕が確認できる。B類は底部から口縁部にかけて斜上方に立ち上がるタイプである(229)。県内では、境興野遺跡で出土している。体部上半のみの出土であるが口径は544㎜を測る。A類と同様、口縁部には指ナデ痕とハケメ痕が確認できる。C類は小型の製塩土器である(25・44・226・232)。底径は90～135㎜を測る。外面には輪積み痕、内面には指ナデとハケによる調整痕が残る。

(5)　灰釉陶器

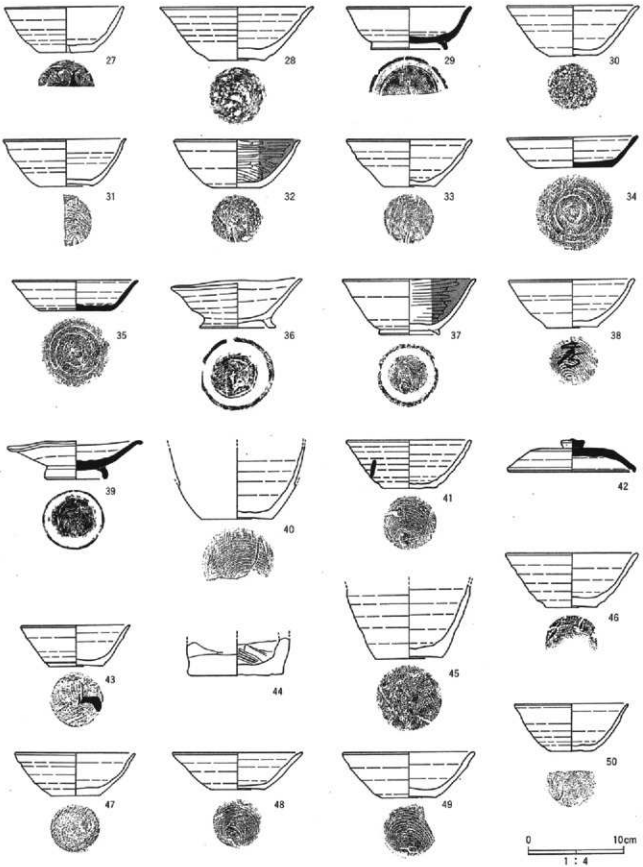
ＳＤ460より3点出土している。99は皿、100・101は碗状の器形をなすものと考えられる。時期は猿投窯の黒笹90号窯期に比定され、9世紀後半と考えられる。(99)は口唇部が端返りの皿で、口縁部が施釉されていない。

2　陶磁器

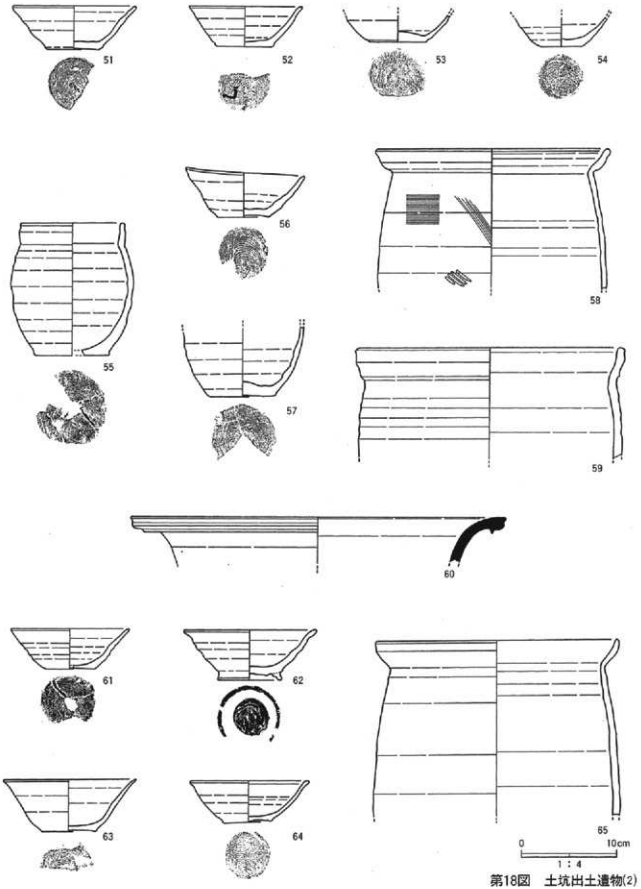
陶磁器は瀬戸・美濃(6点)、白磁(2点)、青磁(4点)、染付(8点)、朝鮮陶器(1点)が認められたが、全て包含層からの出土である。以下にその概要を述べる。〈瀬戸・美濃〉(233)は窖窯期の平碗である。体部外面下部に削り調整が見られる。(234)・(235)は碗である。(236)の小皿は見込みに蛇の目形に釉を剥ぎ取った痕がある。(237)は袴腰形香炉で釉に貫入が入る。体部内面は露胎である。(238)は窖窯期の天目茶碗片と見られる。〈白磁〉(239)は皿である。底部のみ1/2の残存であるが、高台の4カ所に抉りがあり見込みに4つの目跡があるものと考えられる。森田分類のD群にあたる(森田1982)。体部下半が露胎となる。(240)は小型の円筒形香炉である。態度が緻密で均一に施釉されている。〈青磁〉いずれも龍泉窯系のものと見られる。(241)は端返りの無紋碗で、濃い釉をかけているため体部外面にはわずかに凹凸が認められる。(242)は袴腰形香炉である。脚の付け根の胎部には、葉のような文が刻まれており、体部最下部のため釉の掛かりが厚い。内面と外面の釉色調が異なる。(243)は外面の体部上部に雷文帯がある丸碗である。内面は釉掛けにむらがある。(244)は端返りの碗である。〈染付〉(245～248)は碗である。(245)・(246)は口縁部小破片であるが、外面の波濤文帯から小野分類のC群Ⅰ類にあたると考えられる(小野1982)。(246)の内外面には貫入が入る。(249～251)は皿である。(250)は見込みに玉取獅子が描かれる端返りの皿で、小野分類のB群Ⅶ類にあたる。(251)は見込み中央部を残して釉を剥ぎ取っている。以上の染付は16世紀代のものと思われる。(252)は肥前系の染付碗である。焼成が悪く、釉が灰褐色を呈している。高台外面は一部釉が流れるが、高台内は露胎となる。(253)は朝鮮陶器の蕎麦茶碗である。口唇部が若干内側に入り、釉肌はざらめいている。



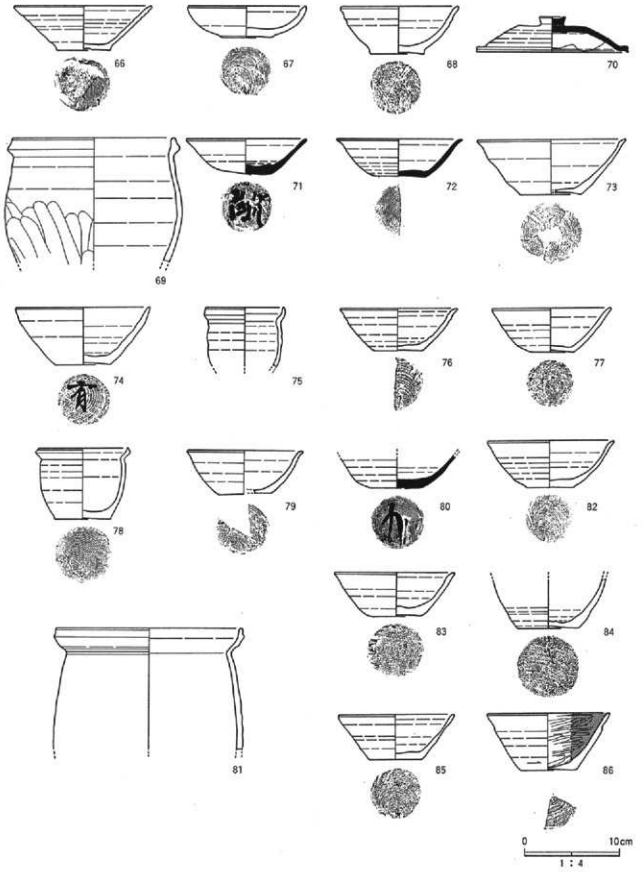
第16図　包含層出土土器



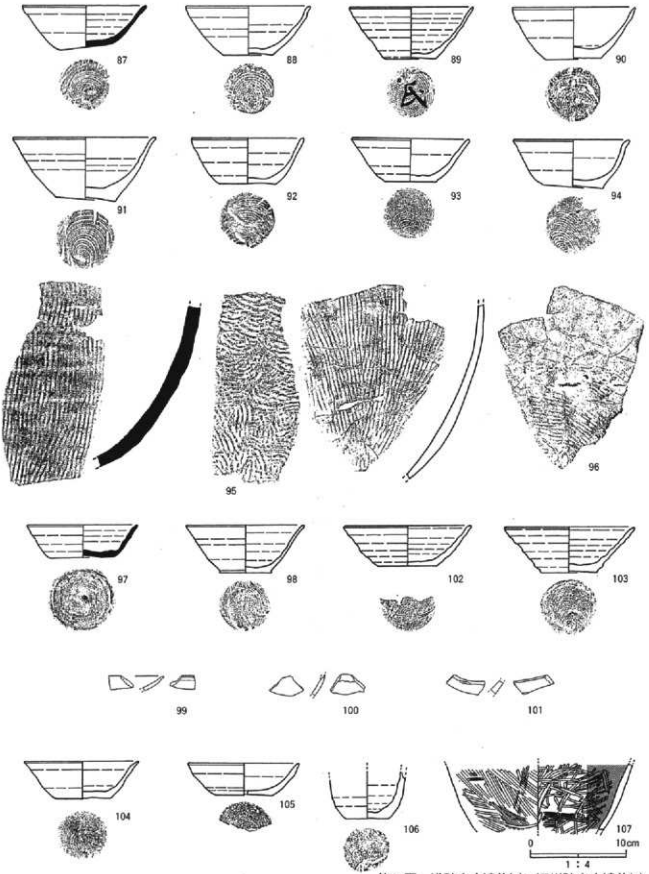
第17図　掘立柱建物跡・土坑出土遺物(1)



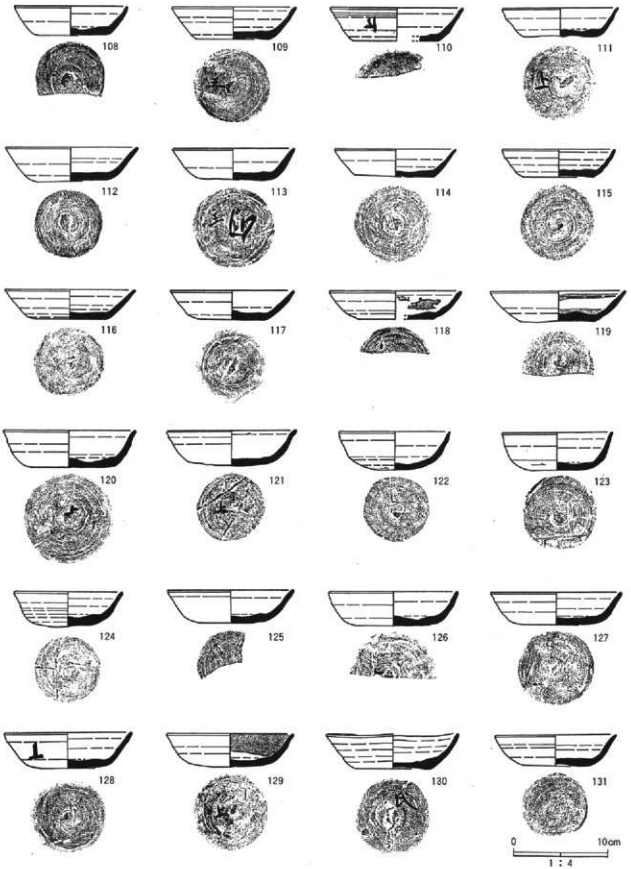
第18図　土坑出土遺物(2)



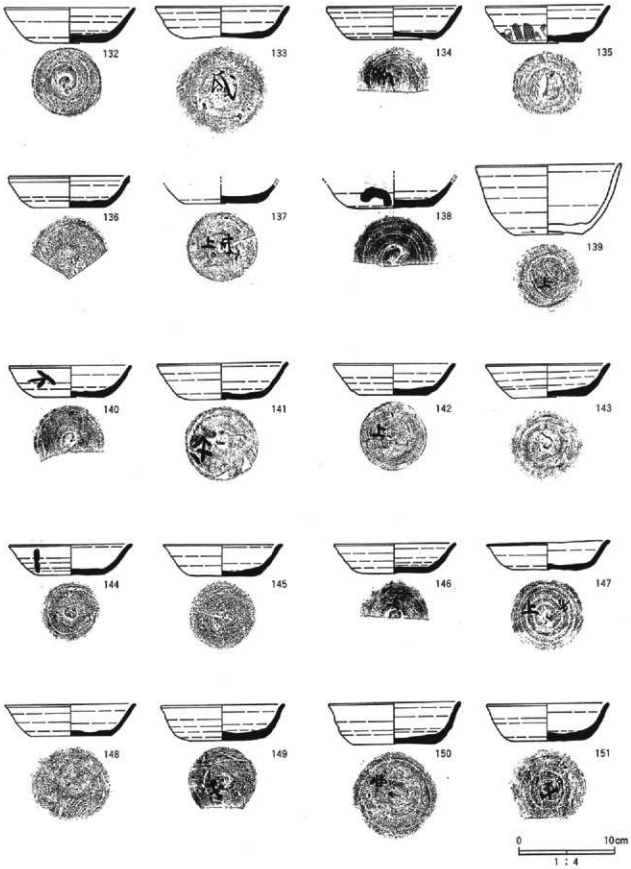
第19図　土坑出土遺物(3)・溝跡出土遺物(1)



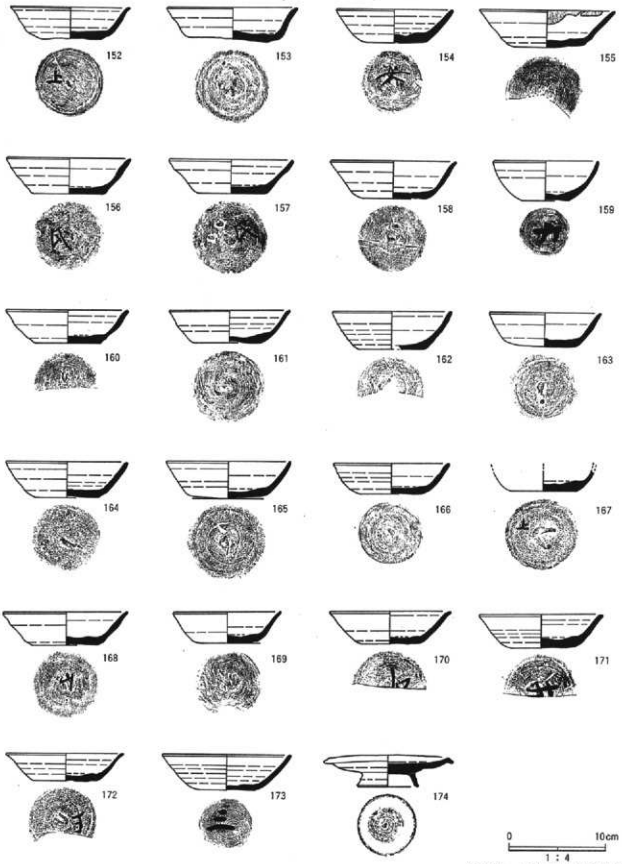
第20図　溝跡出土遺物(2)・河川跡出土遺物(1)



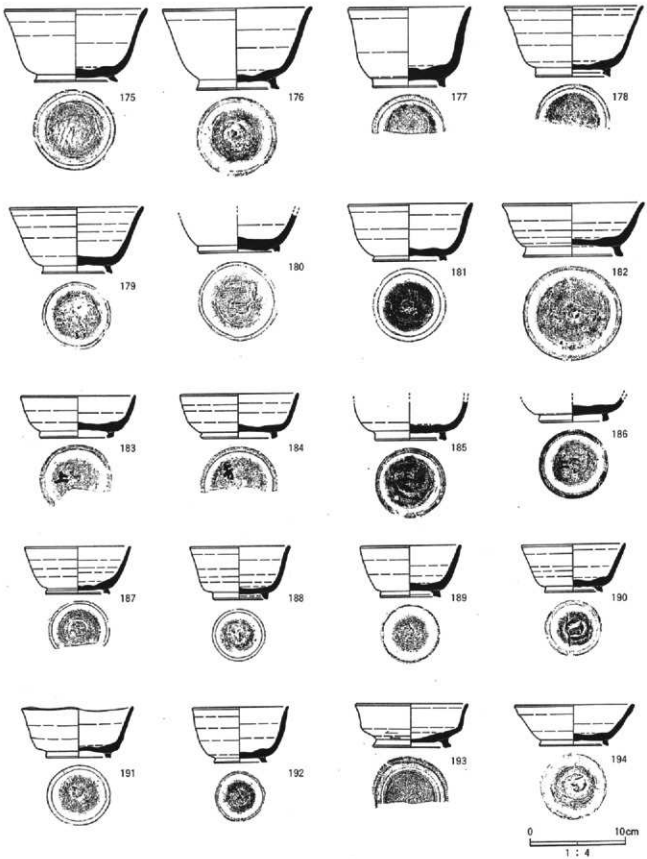
第21図　河川跡出土遺物(2)



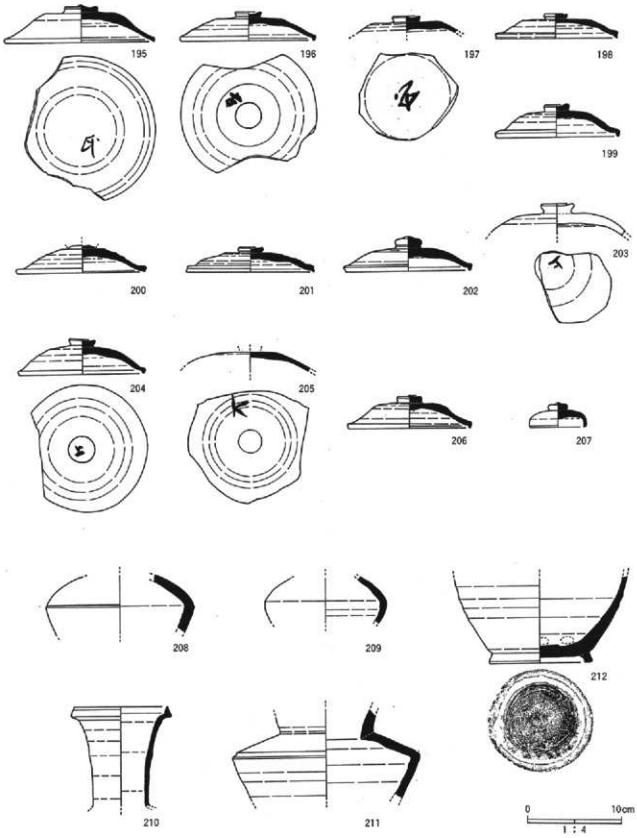
第22図　河川跡出土遺物(3)



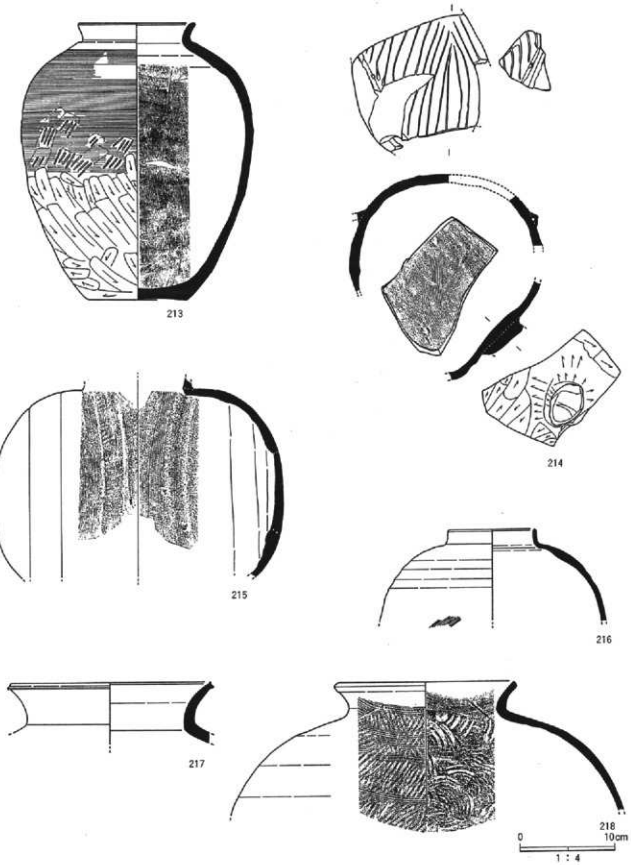
第23図　河川跡出土遺物(4)



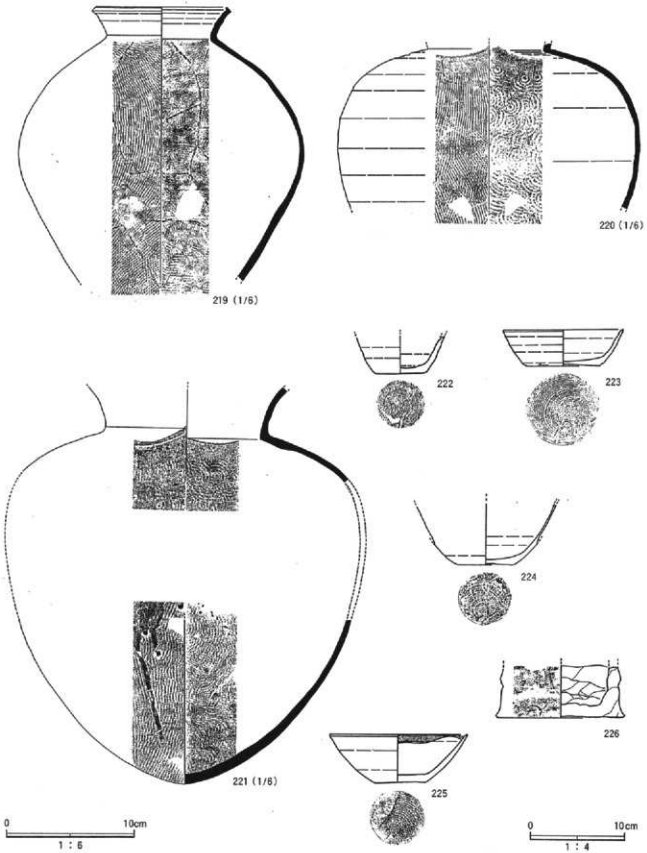
第24図　河川跡出土遺物(5)



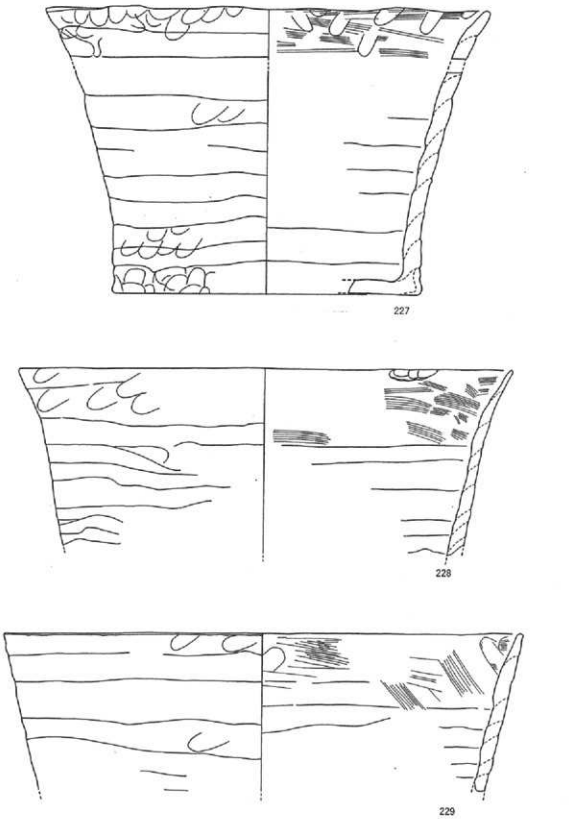
第25図　河川跡出土遺物(6)



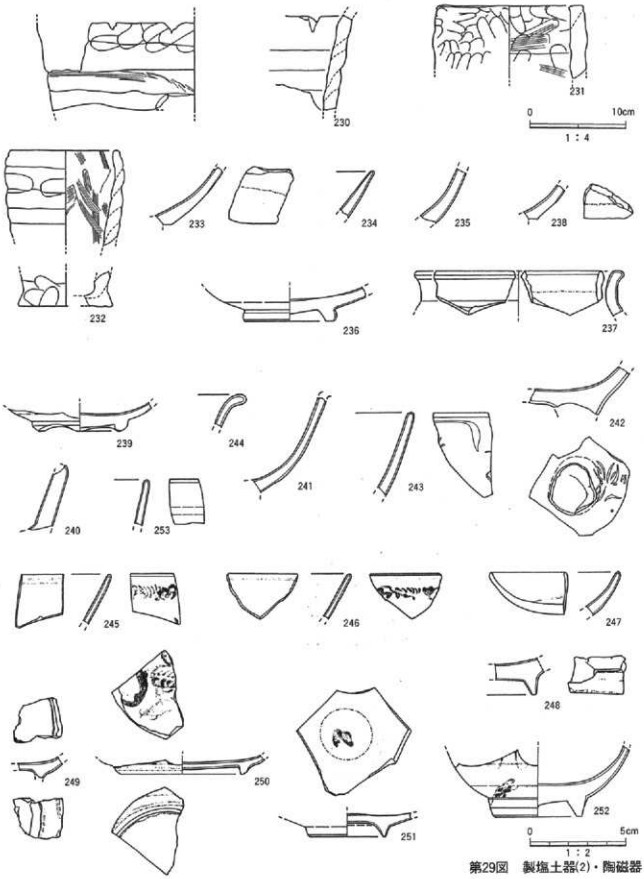
第26図　河川跡出土遺物(7)



第27図　河川跡出土遺物(8)



第28図　製塩土器(1)



第29図　製塩土器(2)・陶磁器

表―２　出土土器観察表(1)

掃開番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点	登録番号	備考
16	1	黒色土器	高台付坏	134			6	回転糸切	ロクロ、ミガキ	ロクロ	A-1Ⅲ	RP1	内黒、高台部剥離
	2	須恵器	坏	134	50	42	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		重ね焼き痕
	3	須恵器	坏	130	56	40	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		重ね焼き痕
	4	須恵器	坏	125	44	40	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-1Ⅲ	RP2	重ね焼き痕
	5	須恵器	高台付坏	126	80	46	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	A-50Ⅲ	RP32	
	6	須恵器	坏	112	72	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-23Ⅲ	RP90	重ね焼き痕
	7	須恵器	坏	116	58	38	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ・ナデ	A-82Ⅲ	RP19	
	8	須恵器	坏	148	60	39	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-72Ⅲ		体部墨書
	9	須恵器	蓋	162		26	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	A-65Ⅲ	RP7	
	10	須恵器	蓋	134		44	4.5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-44Ⅲ		内面墨痕、転用痕カ
	11	須恵器	蓋	170		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-15Ⅲ		
	12	須恵器	蓋	118		24	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	A-62Ⅲ	RP6	つまみ部剥離
	13	赤焼土器	坏	116	55	44	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		
	14	赤焼土器	坏	122	54	49	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-21Ⅲ		
	15	赤焼土器	坏	140	57	49	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-63Ⅲ	RP5	
	16	赤焼土器	坏	118	58	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	D-58Ⅲ		
	17	赤焼土器	坏	162	64	67	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	A-62Ⅲ	RP4	ゆがみあり
	18	赤焼土器	高台付皿	122	58	40	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	B-4Ⅲ	RP84	
	19	赤焼土器	甕		75			静止糸切	ロクロ	ロクロ	B-4Ⅲ		
	20	赤焼土器	甕		59			静止糸切	ロクロ	ロクロ	D-54Ⅲ		二次焼成
	21	赤焼土器	坏	132	55	44	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP10	
	22	須恵器	甕	188			6		ロクロ	ロクロ	D-15Ⅲ		
	23	須恵器	甕				16		アテ・タタキ	タタキ	B-3Ⅲ		格子目状タタキ
	24	須恵器	鳥型土器				9		沈線	タタキ	A-78Ⅲ		胸部羽毛痕
	25	製塩土器			100		18	平底	指ナデ	指ナデ	B-1Ⅲ	RP3	二次焼成
	26	赤焼土器	双耳坏								A-6Ⅲ		ヘラ削り成形
17	27	赤焼土器	坏	126	60	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SB1-EB1		墨書
	28	赤焼土器	坏	160	60	56	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK24		
	29	須恵器	高台付坏	130	80	45	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK30		
	30	赤焼土器	坏	138	50	53	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK30	RP13	内外面口縁部煤付着
	31	赤焼土器	坏	130	54	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK30	RP50	
	32	黒色土器	坏	130	52	51	4.5	回転糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK74	RP14	内黒
	33	赤焼土器	坏	130	52	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK74	RP15	口縁部黒色煤付着
	34	須恵器	坏	137	80	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK81	RP17	重ね焼き痕
	35	須恵器	坏	134	74	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK81	RP16	重ね焼き痕
	36	赤焼土器	高台付坏	137	80	47	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK82	RP18	ゆがみあり
	37	黒色土器	高台付坏	140	65	59	4	回転糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK89	RP40	内黒、焼成不良
	38	赤焼土器	坏	132	54	51	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F8	RP20	墨書「高」
	39	須恵器	高台付皿	144	66	40	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP21	転用硯、ゆがみあり
	40	赤焼土器	甕		75		7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP42	底部二次焼成、内面煤付着
	41	赤焼土器	坏	131	58	51	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK108F9	RP43	体部墨書痕
	42	須恵器	蓋	134		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SP121		
	43	赤焼土器	坏	116	56	43	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK196F1	RP29	墨書、底部「×」ヘラ書き
	44	製塩土器			100		11	平底	指ナデ	指ナデ	SK211		輪積み痕
	45	赤焼土器	甕		70		5.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP220F1	RP33	二次焼成
	46	赤焼土器	坏	138	54	57	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP10	
	47	赤焼土器	坏	128	52	45	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250F1	RP37	
	48	赤焼土器	坏	136	56	39	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP76	
	49	赤焼土器	坏	138	57	48	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP38	内外面煤付着
	50	赤焼土器	坏	120	52	50	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP39	
18	51	赤焼土器	坏	130	55	46	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP68	
	52	赤焼土器	坏	120	62	42	4.2	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP75	墨書、内面煤付着
	53	赤焼土器	坏			60	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP76	
	54	赤焼土器	坏			47	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK250	RP70	

表－3　出土土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	調整技法 外面	出土地点	登録番号	備考
	55	赤焼土器	甕	110	80	140	7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP278		外面黒色煤付着
	56	赤焼土器	坏	127	55	48	5.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378	RP59	ゆがみあり
	57	赤焼土器	甕		70		6	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		外面煤付着
	58	赤焼土器	甕	246			8		ロクロ	ロクロ	SK378F1	RP58	二次焼成
	59	赤焼土器	甕	276			8		ロクロ	ロクロ	SK378F1	RP58	
18	60	須恵器	甕	394			9		ロクロ	ロクロ	SK378		
	61	赤焼土器	坏	126	55	43	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		
	62	赤焼土器	高台付坏	140	68	53	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK378		焼成不良
	63	赤焼土器	坏	140	56	55	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK382	RP66	
	64	赤焼土器	坏	125	50	44	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK409F1	RP56	口縁部黒色煤付着
	65	赤焼土器	甕	260			7.5		ロクロ	ロクロ	SP503	RP74	内外面煤付着
	66	赤焼土器	坏	144	56	47	4.4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK455		皿状
	67	赤焼土器	坏	124	55	33	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP504		外面煤付着
	68	赤焼土器	坏	124	57	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SP504		内外面煤付着
	69	赤焼土器	甕	172			7		ロクロ	ロクロ・ミガキ	SK504	RP82	転用硯
	70	須恵器	甕	159		37	4.5		ロクロ	ロクロ	SX601	RP95	墨書、重ね焼き痕
	71	須恵器	坏	126	52	37	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SK601	RP94	内面煤付着
	72	須恵器	坏	132	56	39	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX601	RP91	外面黒色煤付着
	73	赤焼土器	坏	156	66	58	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX601	RP100	
	74	赤焼土器	坏	138	57	61	7	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK601	RP96	墨書「有」
	75	赤焼土器	小型壺	83			4		ロクロ	ロクロ	SX601	RP100	外面煤付着
19	76	赤焼土器	坏	124	54	45	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SK628		
	77	赤焼土器	坏	126	50	47	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD 44		
	78	赤焼土器	小型壺	95	60	75	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185		外面煤痕
	79	赤焼土器	坏	122	56	46	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185	RP24	口唇部煤付着
	80	須恵器	坏		56		4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD185F1	RP23	転用硯、墨書「力」
	81	赤焼土器	甕	200			5.7		ロクロ	ロクロ	SD186		
	82	赤焼土器	坏	134	50	49	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD187	RP28	
	83	赤焼土器	坏	127	58	46	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD187F1	RP26	内面煤付着
	84	赤焼土器	甕		66		4.5	鋸止糸切	ロクロ	ロクロ	SD188F2	RP27	内外面煤付着
	85	赤焼土器	坏	123	56	47	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD225		
	86	黒色土器	坏	130	58	60	4.5	回転ヘラ	ヘラミガキ	ロクロ	SD231F1	RP79	内黒、底部下端ヘラ掻り
	87	須恵器	坏	132	54	45	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP67	重ね焼き痕
	88	赤焼土器	坏	130	53	52	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP71	体部外面煤付着
	89	赤焼土器	坏	130	54	55	3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP72	墨書「氏」
	90	赤焼土器	坏	128	58	55	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP78	焼成不良
	91	赤焼土器	坏	150	64	65	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP36	
	92	赤焼土器	坏	118	60	49	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F2	RP80	
	93	赤焼土器	坏	124	54	46	4.3	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP34	
	94	赤焼土器	坏	122	61	50	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD231F1	RP81	
	95	須恵器	甕				14		アテ	タタキ	SD231	RP73	
	96	赤焼土器	甕				8		アテ	タタキ	SD231	RP35	
20	97	須恵器	坏	116	70	34	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SD359F2	RP55	重ね焼き痕
	98	赤焼土器	坏	124	54	50	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD460		内面煤付着
	99	灰釉陶器	皿								SD460		猿投産K90様式
	100	灰釉陶器	椀								SD460		猿投産K90様式
	101	灰釉陶器	椀								SD460		猿投産K90様式
	102	赤焼土器	坏	134	62	42	4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD525		内外面煤付着
	103	赤焼土器	坏	136	58	48	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SD525	RP86	
	104	赤焼土器	坏	120	62	39	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SX431F1	RP61	
	105	土師器	坏	116	60	34	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP123	口縁部煤付着、底部～体部下端ケズリ
	106	土師器	小甕		46		7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		体部下端ケズリ
	107	黒色土器	鉢				6		ミガキ	ミガキ	SG702F3		内黒
21	108	須恵器	坏	120	76	31	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-76Ⅲ		重ね焼き痕

表－4　出土土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点	登録番号	備考
21	109	須恵器	坏	130	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP107	墨書「主」、重ね焼き痕
	110	須恵器	坏	140	90	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F2		体部外面墨書「上」
	111	須恵器	坏	122	80	30	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP185	墨書「上」、重ね焼き痕
	112	須恵器	坏	140	72	36	5.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP165	重ね焼き痕
	113	須恵器	坏	130	84	33	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP169	墨書「主」「氏」
	114	須恵器	坏	128	84	29	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP146	刻書「十」、重ね焼き痕
	115	須恵器	坏	119	79	28.5	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕
	116	須恵器	坏	138	75	31	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	117	須恵器	坏	130	80	31	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		内外面煤付着
	118	須恵器	坏	140	80	33	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		内面漆付着
	119	須恵器	坏	142	77	32	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP111	内面漆付着
	120	須恵器	坏	140	95	39	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		墨書「上」
	121	須恵器	坏	136	70	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP109	墨書「上」、火襷痕
	122	須恵器	坏	116	50	41	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		底部黒色煤付着
	123	須恵器	坏	116	62	40	4.3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		内外面黒色煤付着
	124	須恵器	坏	116	70	36	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		火襷痕、内面墨痕付着
	125	須恵器	坏	132	70	35	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」か
	126	須恵器	坏	136	90	36	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702		外面黒色煤付着
	127	須恵器	坏	136	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕、外面墨書「T」
	128	須恵器	坏	136	80	38	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP150	墨書「上」、内外面煤付着、火襷痕
	129	須恵器	坏	134	80	35	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」
	130	須恵器	坏	140	82	37	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP158	重ね焼き痕
	131	須恵器	坏	126	68	32	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP153	重ね焼き痕
	132	須恵器	坏	136	70	37	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」
	133	須恵器	坏	140	95	32	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP171	墨書「十万」
	134	須恵器	坏	140	80	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP177	口縁部内面煤付着、底部ヘラ削り
22	135	須恵器	坏	130	70	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ハケメ	SG702F3	RP173	火襷痕、口縁部直立歪付き坏か
	136	須恵器	坏	126	80	33	4.6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP163	底部墨書「上」「？」
	137	須恵器	坏		75		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP137	体部外面墨書
	138	須恵器	坏		88		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」、底部～体部下端ケズリ、彫形
	139	土師器	坏	152	72	74	5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP126	体部外面墨書「下」重ね焼き痕
	140	須恵器	坏	128	75	33	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	RP157	墨書「八部」
	141	須恵器	坏	138	76	38	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP121	墨書「上」、重ね焼き痕
	142	須恵器	坏	126	72	33	3.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP182	内面黒色煤付着
	143	須恵器	坏	132	80	34	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP172	内面墨書「I」
	144	須恵器	坏	130	60	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP183	二次焼成
	145	須恵器	坏	126	68	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP139	墨書「上」
	146	須恵器	坏	128	70	31	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP166	墨書「上」「十万」、重ね焼き痕
	147	須恵器	坏	130	79	27	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP151	重ね焼き痕
	148	須恵器	坏	137	86	33	3.7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書
	149	須恵器	坏	130	70	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「比口」
	150	須恵器	坏	139	92	44	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP181	墨書、重ね焼き痕
	151	須恵器	坏	128	76	39	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」、重ね焼き痕
23	152	須恵器	坏	126	72	33	3.7	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	RP148	外面黒色煤付着
	153	須恵器	坏	136	74	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	RP138	墨書「安」、体部下端部煤付着
	154	須恵器	坏	122	65	35	4.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP144	口縁部内面黒色煤付着
	155	須恵器	坏	140	80	39	30	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP140	墨書「氏」、重ね焼き痕
	156	須恵器	坏	132	74	38	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP143	墨書「氏」
	157	須恵器	坏	130	76	36	4.3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		重ね焼き痕
	158	須恵器	坏	130	68	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP175	墨書「力」か、口縁部煤付着
	159	須恵器	坏	110	50	42	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP135	
	160	須恵器	坏	130	70	35	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1		底部ヘラ調整
	161	須恵器	坏	126	75	34	3.8	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP120	
	162	須恵器	坏	126	68	40	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP164	

表－5　出土土器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	調整技法 外面	出土地点	登録番号	備考
23	163	須恵器	坏	116	64		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	164	須恵器	坏	129	70	35	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F2		内外面黒色煤付着、二次焼成
	165	須恵器	坏	130	80	38	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4		火襷痕
	166	須恵器	坏	122	67	39	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		外面黒色煤付着、重ね焼き痕
	167	須恵器	坏		76	32	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	168	須恵器	坏	132	70		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP142	墨書「氏」、口縁部煤付着
	169	須恵器	坏	112	67	35	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ナデ	SG702F3	RP122	重ね焼き痕
	170	須恵器	坏	128	76	33	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「氏」か
	171	須恵器	坏	130	80	34	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP168	墨書「十万」
	172	須恵器	坏	125	70	35	3	回転ヘラ	ロクロ 10	ロクロ	SG702F3	RP176	墨書「サ」「上」
	173	須恵器	坏	135	54	29	4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F2		墨書「三」
24	174	須恵器	高台付皿	136	63	37	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP102	
	175	須恵器	高台付坏	150	86	33	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP117	
	176	須恵器	高台付坏	156	86	73	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP130	
	177	須恵器	高台付坏	128	76	85	6.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F4	RP149	灰被り
	178	須恵器	高台付坏	146	79	84	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		灰被り
	179	須恵器	高台付坏	140	73	74	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP131	
	180	須恵器	高台付坏		85	69	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	D-78Ⅲ	RP108	
	181	須恵器	高台付坏	130	78		4.6	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP127	
	182	須恵器	高台付坏	148	105	60	5	回転ヘラ	ロクロ 20	ロクロ	SG702F3	RP179	内外面黒色煤付着
	183	須恵器	高台付坏	120	77	56	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP161	墨書「上」
	184	須恵器	高台付坏	125	80	44	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「十万」
	185	須恵器	高台付坏		75	47	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	186	須恵器	高台付坏		73		5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		墨書「上」
	187	須恵器	高台付坏	110	66		3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SX701F1	RP136	転用硯、重ね焼き痕
	188	須恵器	高台付坏	104	57	50	3.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	189	須恵器	高台付坏	106	61	56	5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	190	須恵器	高台付坏	108	61	54	4	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	191	須恵器	高台付坏	117	66	50	3.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP124	ゆがみあり
	192	須恵器	高台付坏	100	54	52	3.6	回転ヘラ	ロクロ 30	ロクロ	SG702F4	RP156	
	193	須恵器	椀蓋	118	82	58	3	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	194	須恵器	高台付坏	126	72	46	4.2	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP132	
25	195	須恵器	壺	160		43	4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	RP167	内面墨書「氏」
	196	須恵器	壺	144		40	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	RP187	外面墨書「古」
	197	須恵器	壺			31	3.5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		墨書「氏」
	198	須恵器	壺	130			4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		
	199	須恵器	壺	132		27	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	RP128	転用硯
	200	須恵器	壺	140		35	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	D-77Ⅲ	RP110	
	201	須恵器	壺	136		30	6		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F2	RP147	
	202	須恵器	壺	136		26	7		ロクロ 40	ロクロ・ケズリ	SG702		重ね焼き痕
	203	土師器	壺			37	4		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	RP184	内面墨書「上」、赤彩、139の蓋か
	204	須恵器	壺	136			5		ロクロ	ロクロ	SG702F3	RP156	つまみ墨書「上」、重ね焼き痕
	205	須恵器	壺			37	5		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		墨書外面
	206	須恵器	壺	130			4.3		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F4	RP141	
	207	須恵器	壺	60		35	4.5	回転ヘラ	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		長頸壺の蓋か
	208	須恵器	壺			26	9		ロクロ	ロクロ	D-77Ⅲ		灰被り
	209	須恵器	壺				6.5		ロクロ	ロクロ	SX701F2		
	210	須恵器	長頸壺	102			6.5		ロクロ	ロクロ	SX701F2		
	211	須恵器	壺				8		ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3		
	212	須恵器	壺		110		8	回転ヘラ	ロクロ 50	ロクロ・ケズリ	SG702F3	RP125	体部内面下端指押痕
26	213	須恵器	壺	120	112		7	回転ヘラ	ロクロ	タタキ・カキメ	SX701	RP101	
	214	須恵器	鳥形壺			293	8		ナデ・タタキ	沈線・ケズリ	SG702F3		
	215	須恵器	横瓶				8		ロクロ	ロクロ・ハケメ	SG702F4	RP155	
	216	須恵器	短頸壺	92			5		ロクロ	ロクロ	SG702F3		

表－6　出土土器観察表(5)

掃図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点	登録番号	備考
26	217	須恵器	甕	210			9		ロクロ	ロクロ	D-79Ⅲ		
	218	須恵器	甕	190			7		アテ	タタキ・ハケメ	SG702		
27	219	須恵器	甕	216			5		アテ	タタキ	D-77Ⅲ	R P105	
	220	須恵器	甕				7		アテ	タタキ・ハケメ	D-78Ⅲ	R P106	
	221	須恵器	甕				10		アテ	タタキ	SG702F3		
	222	赤焼土器	小壺型		52		4.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F3		
	223	土師器	坏	127	76	38	3.5	回転糸切	ロクロ	ロクロ・ケズリ	SG702F3	R P118	焼成堅め、内外面煤により赤彩
	224	赤焼土器	皿		55		4	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F3	R P129	内外面煤痕
	225	赤焼土器	坏	144	54	50	4.2	回転糸切	ロクロ	ロクロ	SG702F3		内外面煤付着、灯明皿使用カ
	226	製塩土器			135		15	平底	指ナデ	指ナデ、輪積痕	SG702F3		二次焼成
28	227	製塩土器		420	320		18	平底	指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	228	製塩土器		520			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	229	製塩土器		544			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P112	輪積み巻き上げ痕、指整形
29	230	製塩土器					15		指ナデ	指ナデ	SK648	R P112	輪積み巻き上げ痕、指整形
	231	製塩土器	支脚カ	150			13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P112	内外面二次焼成
	232	製塩土器		116	90		13		指ナデハケメ	指ナデ	SK648	R P112	輪積み巻き上げ痕、指整形

表－7　陶磁器観察表

掃図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	出土位置	色調 内面	外面	胎土	備考
29	233	瀬戸・美濃	平碗				A－75Ⅲ	5Y7/3浅黄色	5Y7/3浅黄色	2.5Y6/3にぶい黄色	灰釉、雷紋期
	234	瀬戸・美濃	碗				D－50Ⅲ	2.5Y7/4浅黄色	2.5Y7/4浅黄色	2.5Y7/3浅黄色	灰釉
	235	瀬戸・美濃	碗				B－50Ⅲ	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR5/4にぶい黄褐色	10YR7/4にぶい黄色	灰釉
	236	瀬戸・美濃	皿		(48)		A－3Ⅲ	7.5Y7/2灰白色	7.5Y4/3明オリーブ色	2.5Y6/3にぶい黄色	灰釉
	237	瀬戸・美濃	香炉				B－41Ⅲ	10Y4/2オリーブ灰色	10Y4/2オリーブ灰色	N7/0灰白色	灰釉、梅鉢形香炉
	238	瀬戸・美濃	天目茶碗	(110)			B－53Ⅲ	7.5Y2/1黒色	7.5Y2/1黒色	10YR8/2灰色	鉄釉、雷紋期
	239	白磁	皿		(44)		D－15Ⅲ	2.5Y8/2灰白色	2.5Y8/2灰白色	2.5Y7/3浅黄色	白磁釉、明15C
	240	白磁	香炉				D－106Ⅲ	10Y8/1灰白色	10Y8/1灰白色	N8/0灰白色	白磁釉、円筒形香炉
	241	青磁	碗				B－50Ⅲ	10Y6/2オリーブ灰色	10Y6/2オリーブ灰色	5Y7/1灰白色	青磁釉、元14C
	242	青磁	香炉				B－104Ⅲ	7.5Y6/2オリーブ灰色	10Y6/2オリーブ灰色	7.5Y7/1灰白色	青磁釉、梅鉢形香炉、雑紋、明15C
	243	青磁	碗				A－81Ⅲ	10Y5/2オリーブ灰色	10Y5/2オリーブ灰色	N6/0灰色	青磁釉、雷紋帯
	244	青磁	碗				A－86Ⅲ	5Y5/4オリーブ色	5Y5/4オリーブ色	5Y6/1灰色	青磁釉、15C
	245	染付	碗				A－62Ⅲ			2.5Y8/1灰白色	透明釉、波濤紋帯、明
	246	染付	碗				A－62Ⅲ			2.5Y8/1灰白色	透明釉、波濤紋帯
	247	染付	碗				B－58Ⅲ			2.5Y7/1灰白色	透明釉
	248	染付	碗				B－91Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	249	染付	皿				B－82Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	250	染付	皿		(64)		B－89Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉、玉取獅子
	251	染付	皿		40		B－97Ⅲ			N8/0灰白色	透明釉
	252	染付	碗		45		D－64Ⅲ	2.5Y8/1灰白色	10Y5/2灰色	2.5Y7/2浅黄色	透明釉、17C
	253	朝鮮陶器	碗				B－87Ⅲ	5Y6/1灰色	5Y5/4灰色	5Y7/1灰白色	青瓷茶碗、李朝16C

254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
0
5cm
1：2

第30図　墨書集成(1)

129
186
167
139
152
183
142
121
111
146
147
137
120
185
110
203
157
168
133
170
195
130
156
113
89
80
159
154
74
38
113
109
173
147
134
184
171
141
150
71
149
151
172
137
52
43
126
27
128
140
144
138
197
0
5cm
1：2
第31図　墨書集成(2)

表－8　墨書集成(1)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	底部切離	墨書部位	墨書名	出土地点	登録番号	備考
	254	赤焼土器	高台付坏	回転糸切	底部	十万	ＳＤ194		
	255	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	ＳＸ431Ｆ		
	256	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	ＳＧ702		
	257	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十	Ｄ－41Ⅲ		
	258	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	十カ	ＳＰ225		
	259	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	万カ	Ａ－63Ⅲ		
	260	須恵器	坏	回転糸切	底部	七	ＸＯ－Ⅲ		
	261	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	弐カ	Ｂ－33Ⅲ		内面墨痕
	262	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十万	Ｂ－63Ⅲ		ヘラ書
	263	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十万	Ｂ－57Ⅲ		ヘラ書
	264	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	十	Ａ－60Ⅲ		ヘラ書
	265	須恵器	蓋	回転糸切	底部	三川カ	Ａ－2Ⅲ		
	266	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ2		
	267	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ2		
	268	須恵器	坏		内面	上	ＳＧ702Ｆ2		
	269	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	Ｄ－78Ⅲ		
	270	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏カ	ＳＧ702Ｆ2		
	271	赤焼土器	高台付皿	回転糸切	体部外面	不明	ＳＫ108Ｆ		
	272	赤焼土器	甕	回転糸切	底部	有	Ｄ－25Ⅲ	ＲＰ91	
	273	須恵器	甕	回転糸切	底部	有	Ａ－9Ⅲ		
	274	黒色土器	坏		体部外面	不明	Ａ－12Ⅲ		内黒
	275	須恵器	甕	回転ヘラ	体部外面	不明	ＳＤ359Ｆ		
	276	須恵器	甕	回転ヘラ	底部	王	Ａ－78Ⅲ		
	277	須恵器	鳥形土器	回転ヘラ	底部	不明	Ｄ－54Ⅲ		
	278	須恵器			底部	真	ＳＤ189		内面漆付着
30	279	赤焼土器	双耳坏	回転糸切	体部外面	力カ	Ｂ－4Ⅲ		
	280	赤焼土器	坏		底部	力	Ａ－3Ⅲ		
	281	赤焼土器	坏	回転糸切	体部外面	不明	Ｄ－3Ⅲ		
	282	赤焼土器	高台付坏	回転糸切	底部	力カ	Ａ－1Ⅲ		
	283	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	山カ	ＳＧ702Ｆ2		
	284	須恵器	坏		底部	不明	Ａ－81Ⅲ		
	285	赤焼土器	坏		体部外面	不明	Ｂ－34Ⅲ		
	286	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	不明	Ｄ－5Ⅲ		
	287	赤焼土器	坏	回転ヘラ	底部	不明	Ｂ－34Ⅲ		
	288	須恵器	坏		底部内面	十万カ	Ａ－3Ⅲ		
	289	赤焼土器	高台付坏		体部内面	不明	ＳＫ31Ｆ		
	290	赤焼土器	高台付坏		体部外面	不明	Ｄ－92Ⅲ		
	291	赤焼土器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	292	須恵器	高台付皿	回転糸切	底部	不明	Ｂ－4Ⅲ		
	293	赤焼土器	甕	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	294	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	295	須恵器	蓋	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	296	須恵器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＤ194		
	297	赤焼土器		回転糸切	底部	不明	Ａ－2Ⅲ		
	298	赤焼土器	甕	回転糸切	底部	不明	Ａ－5Ⅲ		
	299	須恵器	坏		体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	300	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	ヘカ	Ｄ－4Ⅲ		
	301	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＰ276Ｆ		
	302	赤焼土器	坏	回転糸切	体部外面	不明	ＳＤ323		
	303	赤焼土器	坏	回転ヘラ	底部	不明	Ｄ－77Ⅲ		
	304	須恵器	坏		底部	不明	Ｄ－77Ⅲ		
	305	須恵器	坏	回転糸切	体部外面	不明	ＳＫ108Ｆ		
	306	赤焼土器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ2		
	307	須恵器	坏		体部外面	不明			

表一９　墨書集成(2)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	底部切離	墨書部位	墨書名	出土地点	登録番号	備考
21	129	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3		内外面煤付着
24	186	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3		
23	167	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3		
22	139	須恵器	坏	回転糸切	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ126	
22	152	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ4	ＲＰ148	
24	183	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ161	
22	142	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ182	
21	121	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＸ701Ｆ1	ＲＰ109	
21	111	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ185	
22	146	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ166	
22	147	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ151	
22	137	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ137	
21	120	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＸ701Ｆ1		
24	185	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ184	
21	110	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	上	ＳＧ702Ｆ2		
25	203	須恵器	蓋		体部内面	上	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ142	口唇部煤付着
23	157	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ171	
23	168	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＸ701Ｆ1		
22	133	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ167	
23	170	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ158	
25	195	須恵器	蓋		体部内面	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ143	
21	130	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ169	
23	156	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ72	
21	113	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	氏	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ23	転用硯
20	89	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	氏	ＳＤ231Ｆ1	ＲＰ135	口唇部煤付着
19	80	須恵器	坏	回転糸切	底部	力	ＳＤ185Ｆ1	ＲＰ144	
23	159	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	力	ＳＸ701Ｆ1	ＲＰ96	
23	154	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	安	ＳＸ701Ｆ1	ＲＰ20	
19	74	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	有	ＳＫ601	ＲＰ169	
17	38	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	高	ＳＫ108	ＲＰ107	
21	113	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	主	ＳＧ702Ｆ3		
21	109	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	主	ＳＸ701Ｆ1	ＲＰ151	
23	173	須恵器	坏	回転糸切	底部	三	ＳＧ702Ｆ2	ＲＰ177	
23	147	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	ＳＧ702Ｆ3		
22	134	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ108	
24	184	須恵器	高台付坏	回転ヘラ	底部	十万	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ121	
23	171	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	十万	Ｄ－78層	ＲＰ181	
22	141	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	八郎	ＳＸ701Ｆ1	ＲＰ94	
22	150	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	北口	ＳＧ702Ｆ3		
19	71	須恵器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＫ601	ＲＰ176	内面煤付着
22	149	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ137	
22	151	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ76	
23	172	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ29	
22	137	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702Ｆ3		
18	52	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＫ250	ＲＰ150	
17	43	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＫ196Ｆ1	ＲＰ157	
21	126	須恵器	坏	回転ヘラ	底部	不明	ＳＧ702	ＲＰ183	
17	27	赤焼土器	坏	回転糸切	底部	不明	ＳＢ1－EB1		
21	128	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	下	ＳＧ702Ｆ3		
22	140	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	下ヵ	ＳＧ702Ｆ4	ＲＰ187	
22	144	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ184	
22	138	須恵器	坏	回転ヘラ	体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ3	ＲＰ159	
25	197	須恵器	蓋		体部内面	氏	ＳＧ702Ｆ3		
25	196	須恵器	蓋		体部外面	古	ＳＧ702Ｆ3		
25	200	須恵器	蓋		体部内面	上	ＳＧ702Ｆ3		139の蓋か
25	204	須恵器	蓋		つまみ	上	ＳＧ702Ｆ3		
25	205	須恵器	蓋		体部外面	不明	ＳＧ702Ｆ3		

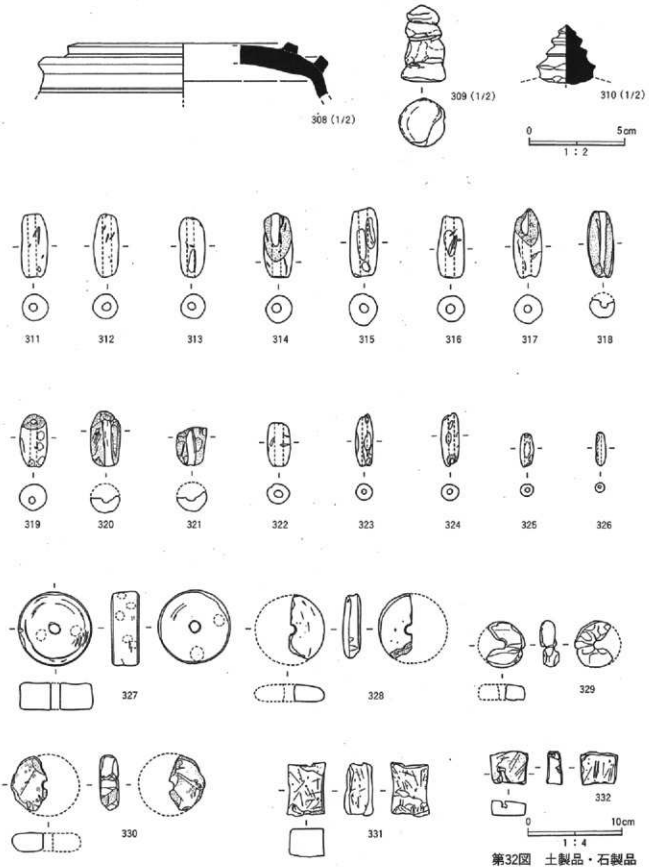
3　土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨

土製品は、円面硯、土塔、土錘他が出土した。円面硯(308)は、B調査区の包含層Ⅲ層からの出土である。破片のみの出土であり、歪みもあるが、口径151㎜、外堤・内堤を有する圏脚円面硯と考えられる。高瀬川流域では初めての出土であり、山形県内でも最北での出土となる。土塔(309)は、五輪塔と考えられる。(310)は、須恵製で蓋のつまみと考えられる。経筒の一部とも考えられる。管状土錘は16点出土している。全て手捏で作られており、平面形は縁に丸みを持つ円柱形または楕円形である。その大小から次の4類に分類できる。A類－最大径25㎜以上で長さ70㎜内外、軸径8㎜内外を測るもの(311～321)。B類－最大径20～25㎜、長さ50㎜内外を測り、軸径はA類に同じもの(322)。C類－最大径18㎜内外、長さ55㎜、軸径5㎜内外を測るもの(323・324)。D類－最大径10～15㎜の小型のもの(325・326)。このうち、A類、B類はA～B－90G付近のⅢ層下面からまとまって出土している。また、漁に使ったと思われる浮子(330)が出土している。材質は火山岩で、径70㎜の円形と推定される。中央に10㎜の網を通す孔がある。他に土製・石製の紡錘車、砥石などが出土している。

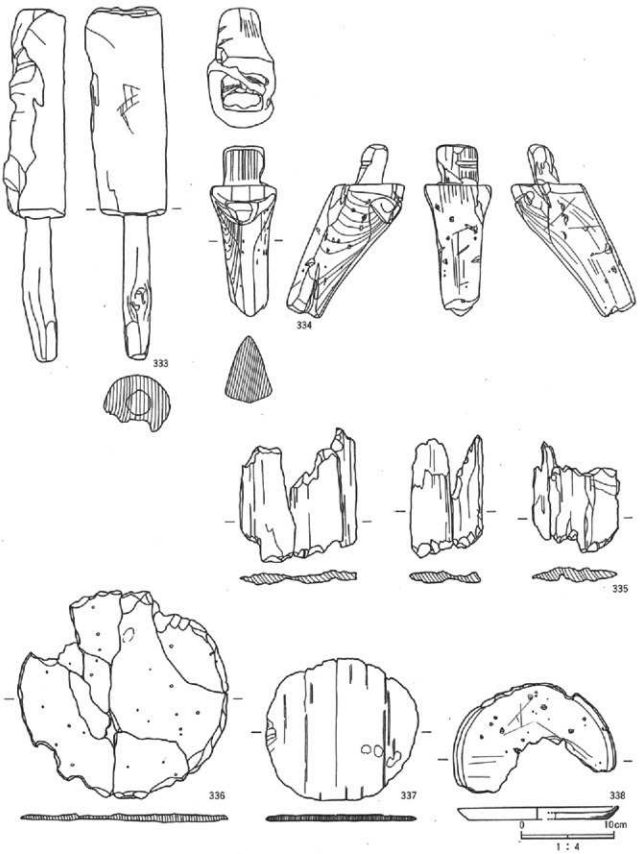
木製品は、今調査ではSG702河川跡からの出土品と、包含層からの出土品を合わせて整理用コンテナ6箱の木製品を得た。全般に遺存状態は良いといえない。(333)は砧である。柄部は良好に遺存しているが、先端はだいぶ摩耗しており、槌部の1/3ほどが欠落している。(334)はその形状から、ほぞ穴で天板などと結合し「ハ」の字に開く足を想定できる。断面は二等辺三角形を呈し、その底辺部を外側に、斜辺部を内側に配置するように思われる。ほぞの外に向く面には断面半円形の横溝が刻まれる。脚内側上端近くには横方向に切込みが見られるが、意図は不明である。(335)は板状木製品で、下端部を面取りしている。腐食が著しく接合できないため、分割して図示した。用途は不明である。(336・337・348)は曲物底板である。(337)は縁辺部に断面弧状の溝が数条走り、何らかの加工痕かとも思われる。(338)は皿と思われる。(339)は全長200㎜ほどの角棒状を呈するが、両端を斜めに切り落とし、側面形は台形状を呈する。台形の上底部が上と思われ、中央部が削られて緩く窪んでいる。両端から35㎜ほどの位置に方形のほぞ穴が2つ穿たれるが貫通していない。(340～343)は棒状木製品である。(344・346・347)は箸で、長さ200㎜位と推定する。(346・347)は残存部を図示した。(345)は長さ200㎜位、幅50㎜位の板状を呈する。両面に丁寧な削りが施されており、一端に穴が穿たれる。他端は残存部の形状から剣形を呈するように見受けられるが、遺存状態が悪いため工作の痕を詳かにし得なかった。(349)は小型の漆器椀である。口縁部は遺存していないが、口径100～120㎜と推定する。内外面とも赤漆が塗られる。(350)は円板状を呈し、中央に直径12㎜の孔が穿たれる。片面の一部は半分の厚さに削り取ってある。蓋の可能性が考えられる。

金属製品は包含層から3点出土している。(351)は鏃である。身の部分の長さは192㎜、厚さ4㎜と推定される。(351)は煙管の吸口である。(353)は蹄鉄の可能性がある。

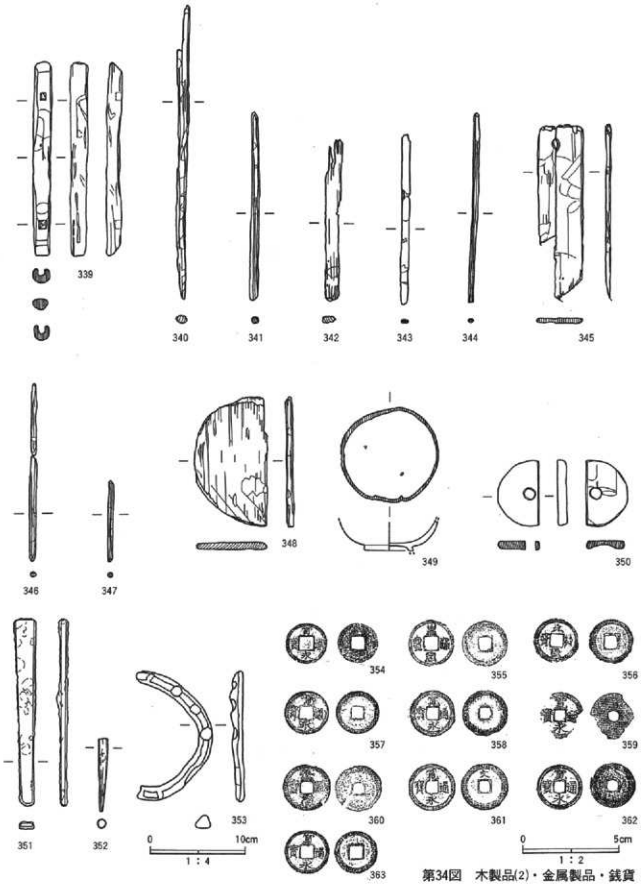
銭貨は10点出土している。353は皇宋通寶、356元符通寶、360景祐元寶の北宋銭がある。寛永通寶である361は背に「文」の一字が認められる。寛文8年(1668)鋳造の「文銭」である。


308 (1/2)
309 (1/2)
310 (1/2)
0
5cm
1：2
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
0
10cm
1：4

第32図　土製品・石製品



第33図　木製品(1)



第34図　木製品(2)・金属製品・銭貨

表—10　土製品・石製品・木製品・金属製品・銭貨観察表

土製品

挿図番号	遺物番号	器種	計測値(mm・g) 最大径	軸径	長さ	重さ	出土地点	登録番号	備考
32	308	円面硯	151		10		A—29Ⅲ		内場・外場あり、歪みあり
	309	土与	24		41		A—93Ⅲ		酸化磁焼成
	310	壷つまみ	15		30		A—79Ⅲ		陶製経筒の摘みカ
	311	管状土錘	27	8	67	54.4	A—95Ⅲ	RP8	
	312	〃	26	9	67	36.6	B—91Ⅲ	RP45	
	313	〃	27	8	64	47.2	B—91Ⅲ	RP46	
	314	〃	29	9	67		B—91Ⅲ	RP48	
	315	〃	34	9	72	69	B—91Ⅲ	RP47	
	316	〃	27	9	66	46.5	SX396F1	RP62	
	317	〃	30	8	73	48.8	A—95Ⅲ		
	318	〃	27	8	70		A—95Ⅲ		
	319	〃	29	7			A—91Ⅲ		
	320	〃	31	8			B—91Ⅲ		
	321	〃	31	9	9		B—92Ⅲ	RP63	
	322	〃	23	8	46	21.9	A—91Ⅲ		
	323	〃	18	5	55	16	SX396F1	RP92	
	324	〃	18	6	56	15.9	SD525		
	325	〃	14	5	35	5.6	D—33Ⅲ	RP178	
	326	〃	10	3.5	35	3.3	SK233		
	327	紡錘車	71	12	(厚さ)28	216.5	SG702F2		

石製品

挿図番号	遺物番号	器種	計測値(mm・g) 最大径	軸径	長さ	重さ	出土地点	登録番号	備考
32	328	紡錘車	(径)76	(軸径)10	18		D—60Ⅲ		
	329	〃	(径)48	(軸径)8	13		SG702F2		
	330	浮子	(径)70	(軸径)10	30	8.9	A—66Ⅲ	RQ9	
	331	砥石	54～	33	30		A—72Ⅲ		
	332	〃	35～	39	15		B—77Ⅲ		

木製品

挿図番号	遺物番号	器種	計測値(mm) 最大径	軸径	長さ	出土地点	登録番号	備考
33	333	砧	334	82	82	SG702F2		はぎ：断面長方形、長さ・幅43mm
	334	脚	185	70	70	SG702F2	RW180	最大部材計測
	335	板状部材	130	124	124	SG702F2	RW188	柾目
	336	曲物底板		(径)227	(径)227	SG702F2	RW145	柾目
	337	曲物底板		(径)160	(径)160	SG702F2	RW154	側高12mm、板目
	338	皿カ	(口径)173	(底径)147	(底径)147	SG702F2	RW133	中央部計測
34	339	棒状部材	203	16	16	SG702F2	RW170	
	340	棒状木製品	311	13	13	SG702F2	RW186	
	341	〃	198	9	9	SG702F2	RW162	
	342	〃	170	11	11	SG702F2		
	343	〃	179	8	8	SG702F2		
	344	箸	199	6	6	SG702F2		
	345	板状木製品	185	47	47	SG702F2		穿孔、柾目
	346	箸	187	7	7	SG702F2		
	347	〃	[85]	5	5	SG702F2		
	348	曲物底	(径)136	[76]	[76]	A—103Ⅲ		柾目
	349	漆器椀	(底径)50	(器厚)6	(器厚)6	B—97Ⅲ		推定口径100～120mm
	350	〃	(径)70	[43]	[43]	B—73Ⅲ	RW44	孔径12mm、柾目

〔　〕は残存値

金属製品・銭貨

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm・g) 長さ	幅(径)	厚さ	出土地点	登録番号	備考
34	351	鉄製品	鑿	196	22	8.5	A—86Ⅲ		
	352	鉄製品	煙管	77	(径)10		D—33Ⅲ	RM93	
	353	鉄製品	鐔	212	15	13	A—1Ⅲ		
	354	古銭	寛永通寶		(径)21.3	1	A—22		
	355	古銭	寛永通寶		(径)24.5	1	A—71		初鋳1038年北宋
	356	古銭	元豊通寶		(径)24	1.2	A—61		初鋳1098年北宋
	357	古銭	寛永通寶カ		(径)23	1	D—27Ⅲ		
	358	古銭	寛永通寶		(径)24.2	1	B—35Ⅲ		
	359	古銭	寛永通寶		(径)24.5	1	B—35Ⅲ		
	360	古銭	景祐元寶		(径)25	1.2	A—58Ⅲ		初鋳1034年北宋
	361	古銭	寛永通寶		(径)25	1.2	B—35Ⅲ		「文」初鋳1668年
	362	古銭	寛永通寶		(径)23.8	1.1	B—35Ⅲ		
	363	古銭	寛永通寶		(径)23	1	B—35Ⅲ		

Ⅵ 総　　括

今調査は、一般国道345号道路改築工事に係る緊急発掘調査である。調査では、第１・２次調査と同じような畑の畝跡と考えられる溝状遺構群、溝状遺構群と重複する土坑群や柱穴、掘立柱建物跡が検出された。溝状遺構群は７区画が確認され、それぞれ２～４時期の変遷が認められた。ＳＢ１・２が検出されたＡ～Ｂ-53～58Ｇはその切り合いから耕作地を廃棄して居住域を作り出したと推測される。また、建物跡の周辺には土坑や建物と主軸を同じにする溝跡が検出されており、その土地の利用法や企画性を伺い知ることができる。また、Ｅ調査区で検出された河川跡からは土器や木製品などの多量の遺物が出土している。

遺物では、第１・２次調査で出土している土器と同じような９世紀から10世紀の中葉を主体とする土器がＡ・Ｂ・Ｃ調査区の土坑や溝跡、包含層から出土している。この他に８世紀後半まで遡ると考えられる土器群が河川跡からまとまって出土している。以下、今調査で出土した墨書土器と、遺跡の性格について若干の考察を加えたい。

１　墨書土器について

墨書土器は、律令制下における地方行政や、集落内での生活・祭祀の様子を追求するための貴重な資料となっている。これまで庄内地方では2,500点以上の墨書土器が出土しており、本遺跡でもこれまでの調査で137点が出土している。今調査では107点の墨書土器が出土しており、遊佐町管内では大坪遺跡131点、宮ノ下遺跡126点とともに有数の出土量となる。種別的には、須恵器79点、赤焼土器27点、黒色土器１点である。須恵器の器形別では無台坏64点、有台坏８点、蓋７点となる。赤焼土器、黒色土器については全て坏に描かれている。一般的に墨書土器は供膳形態の土器に多く見られ、本遺跡においてもその例外ではないといえる。無台坏、有台坏の底部切り離しで見た場合、ヘラ切りが63点、回転糸切りが９点となり、ヘラ切り無台坏への墨書が主体をなすといえる。墨書部位については、体部が24点、蓋のつまみが１点の他は全て底部外面に描かれている。底部外面に、一文字の墨書が二つある土器も３点確認される。出土地点からみると、Ｅ区河川跡からの出土が54点と群を抜いており、また、墨書が描かれている器には比較的使用痕が認められないものがあることから、日常的でない特別の用途に使用されたものと考える。

今調査で出土した墨書土器の文字に着目すると、一字資料のものでは「上」が最も多く21点、「氏」13点、「安」、「高」、「力」、「夷」などがある。二文字資料のものでは、「十万」10点、（内、２点はヘラ書き）、「八部」、「比口」、「三川」がある。「上」は、県内では地正面遺跡、生石２遺跡、南興野遺跡などで出土しており、東日本各地で確認できる文字である。21点の中には筆跡が似るものもある。「氏」は、１次調査でも畝状遺構から１点出土している。その筆跡では、①（130）・（157）・（195）、②（133）・（156）・（197）・（266）、③（89）の３種があることが分かる。①･②は河川跡から出土したもので、須恵器坏の底部外面や蓋の体部の一部に記されている。８世紀後半から９世紀初めに比定できる土器群である。一方、③はＳＤ231から出土した土

器である。赤焼土器の底部外面に記されており、9世紀中葉に否定できる。このように、①・②と③では土器編年において半世紀以上の差があり、この「氏」が姓を表すものかは断言できないが、この文字を持つ集団がこの地に存続していたものと推測される。

また、第1・2次調査で出土しているが数字の墨書が多い。これまでの調査では「七」、「十」、「千」、「万」、「千万」などが出土している。今調査では、「弐」、「三」、「七」、「十」、「万」、「十万」の文字が記されたものが出土している。数字が記されている墨書土器は庄内地方でも多数出土しており、これらの文字も特定の者、或いは集団の所属か所有を表すと考えると、前述の墨書と同じ性格を持つと考えられる。

2　遺跡の性格と年代観について

今次の調査で北目長田遺跡は3次の調査となった。調査面積は第1次調査＝3,300㎡、第2次調査＝7,920㎡、第3次調査＝6,600㎡、計17,800㎡となる。北目長田遺跡は東西に長い遺跡で推定遺跡面積は117,600㎡にのぼる。つまり、この第1～3次調査で遺跡面積の約15％を調査したことになる。ここで、これまでの調査と今次の調査成果を合わせ、遺跡の性格や年代観についてふれたい。

今調査区は、北目長田遺跡の中央を縦断する国道345号に沿い、南端から北端まで全長625mを範囲としている。前述の通り、全長625mの間には遺構の密な区域と希薄な区域があり、15～33Gにかけてはほとんど遺構が確認されず、包含層からの遺物出土量も少ない。これは、第2次調査のトレンチ調査区からも同じ結果が得られている。このことから、当初予想された遺跡の分布とは様相が異なり、遺跡の南端から北端までは連続していないことが推定される。また、北端部の－7～5Gはさらに北側に拡がる様相を呈しており、現在の丸子集落の方に続いていくものと考えられる。

また、第1・2次調査で出土した遺物は9世紀中葉から10世紀中葉を主体としていた。しかし、今調査ではその年代よりも若干遡る土器群が出土した。即ち、E調査区で検出された河川跡出土の土器群である。この河川跡からは、破片数で1,258点の土器が出土している。器種別では須恵器が約70％をしめ、赤焼土器は他の遺構に比べ少ない比率である。須恵器は前述したとおりほとんどが底部ヘラ切りによる切り離しで、8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に比定できるものが主体をなす。高瀬川流域では宮ノ下遺跡のSG1200出土土器にこの年代の土器群が見られるが、他の遺跡が9世紀から10世紀にかけて継続していることを考慮すれば、本遺跡が比較的早い時期から集落として成立していたことが推測できる。一方、国道345号の西側の土器群は9世紀中葉から10世紀にかけてのものが主体をなし、隣接する第2次調査区と同じ時期に比定できる。これらのことから、本遺跡は8世紀後葉から10世紀中葉にかけて継続していたものと考えられる。

最後に、今調査によって検出された資料の理化学分析結果（分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託）について列記しておく。分析は樹種同定2点を行った。資料①はSP504から出土

した炭化材と②ＳＫ648から出土した炭化材である。

ＳＰ504の覆土から出土した炭化材には２種類が認められた。落葉広葉樹のブナ属（図版24－１）とハリギリ（図版24－３）であった。炭化材は柱材の可能性があるが、２種類認められたことも考慮すると他の部材も混入していることが考えられる。この中で、秋田県払田柵跡の門柱などに利用されているハリギリが柱材として利用され、ブナ属も柱以外の部材に利用された可能性があると推定している。

②は落葉広葉樹のカエデ属（図版24－２）に同定され燃料材として使用されたことが推定される。ＳＫ648から出土した多量の製塩土器片とともにこの燃料材が出土していることから、資料が少ないため明確には断言できないが本遺跡内で製塩活動が行われたことも考えられる。

参考文献

川崎　利夫他　「境奥野遺跡発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財調査報告書第46集　1981（以下、山埋文報と略す）

野尻　侃他　「千河原遺跡発掘調査報告書」　山埋文報80集　1984

伊藤　邦弘他　「大橋遺跡第１次発掘調査報告書」　山埋文報121集　1988

斎藤　俊一他　「大坪遺跡第２次発掘調査報告書」　山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第23集　1995（以下、山埋文セン報と略す）

阿部　明彦他　「北目長田遺跡・橋俣遺跡・堂田遺跡発掘調査報告書」　山埋文セン報24集　1995

阿部　明彦他　「上高田・木戸下遺跡発掘調査報告書」　山埋文セン報25集　1995

野尻　侃他　「北目長田遺跡・橋俣遺跡第２次発掘調査報告書」　山埋文セン報31集　1996

斎藤　俊一他　「宮ノ下遺跡発掘調査報告書」　山埋文セン報32集　1996

浅黄　喜悦他　「西谷地遺跡第３次発掘調査報告書」　山埋文セン報33集　1996

高橋　敏他　「西町田下遺跡発掘調査報告書」　山埋文セン報44集　1997

国土調査　「土地分類基本調査　吹浦・鳥海山」　1994

阿部　明彦他　「東北地方の古代集落　庄内平野」　第24回古代城柵官衙遺跡検討会　1997

近藤　義郎編　「日本土器製塩研究」　青木書店　1994

中島町教育委員会　「ヤトン谷内遺跡発掘調査報告書」　1995

平川　南　「墨書土器とその字形」「国立歴史民俗博物館研究紀要第35集」　1991

毛田　勉　「14～16世紀の白磁の分類と編年」　「貿易陶磁研究№２」　1982

小野　正敏　「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」　「貿易陶磁研究№２」　1982

齋藤　孝正　「東海地方の施釉陶器生産」

報告書抄録

ふりがな	きためながたいせきだいさんじはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	北目長田遺跡第３次発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第56集
編集者名	伊藤　元・豊野　潤子
編集機関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番1号　TEL 023-672-5301
発行年月日	西暦1998年3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
北目長田（きためながた）	山形県（やまがたけん）鮭海郡（さけみぐん）遊佐町（ゆざまち）大字北目字長田（おおあざきためながた）	6461	平成３年度登録	39度02分28秒	139度54分00秒	19970506～19971120	6600	一般国道345号道路改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北目長田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡　2 土坑　145 溝状遺構　237 河川跡　2 ピット　202	須恵器 赤焼土器 黒色土器 製塩土器 陶磁器 土製品（土錘・円面硯・他） 石製品（砥・浮子・他） 木製品（砧・脚・他） 金属製品（鑿・煙管・古銭）	南北に走行する遺構群を多数検出。河川跡からは、須恵器を中心に多量の土器が出土している。墨書土器も多く認められる。

図　　版

遺跡近景（西から）

遺跡遠景（東から）

図版 2

重機械表土除去

グリッド設定

遺構検出

遺構精査

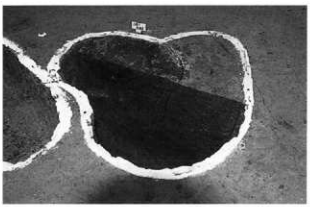
記録（平面実測）

調査説明会

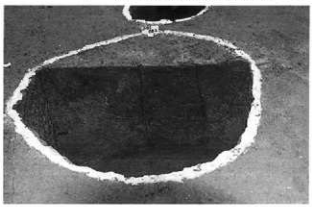
基本層序Ａ－78（東から）

基本層序Ｄ－52（西から）

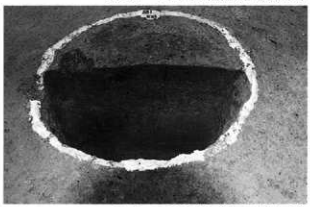
ＳＢ１掘立柱建物跡検出状況（北から）



ＳＢ１－ＥＢ１土層断面（東から）



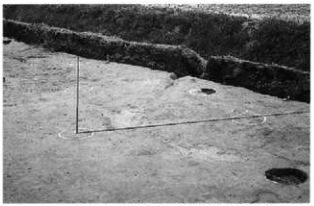
ＳＢ１－ＥＢ２土層断面（東から）



ＳＢ１－ＥＢ３土層断面（東から）

ＳＢ１－ＥＢ５土層断面（東から）

図版 4



ＳＢ２掘立柱建物跡検出状況（北から）

ＳＢ２－ＥＢ1土層断面（東から）

ＳＢ2－ＥＢ２土層断面（東から）

ＳＢ２－ＥＢ3土層断面（東から）

ＳＫ250土坑土層断面・遺物出土状況（南から）

ＳＫ250土坑検出状況（北から）

ＳＫ81土坑土層断面（北から）

ＳＫ108土坑遺物出土状況（東から）

ＳＫ108土坑土層断面（東から）

ＳＫ74土坑土層断面・遺物出土状況（西から）

ＳＫ527土坑土層断面（南から）

ＳＫ30・33土坑土層断面（西から）

ＳＤ44溝跡、ＳＫ409土坑土層断面（南から）

図版6

ＳＫ459土坑，ＳＤ460溝跡土層断面（北西から）

ＳＫ457・458土坑土層断面（南東から）

ＳＫ82土坑土層断面（西から）

ＳＫ631・630土坑土層断面（東から）

ＳＫ643土坑土層断面（南から）

ＳＫ89土坑土層断面（西から）

ＳＫ601土坑検出・遺物出土状況（南から）

ＳＫ601土坑土層断面（南から）

ＳＫ378土坑遺物出土状況（北から）

ＳＫ378・379・380土坑土層断面（南西から）

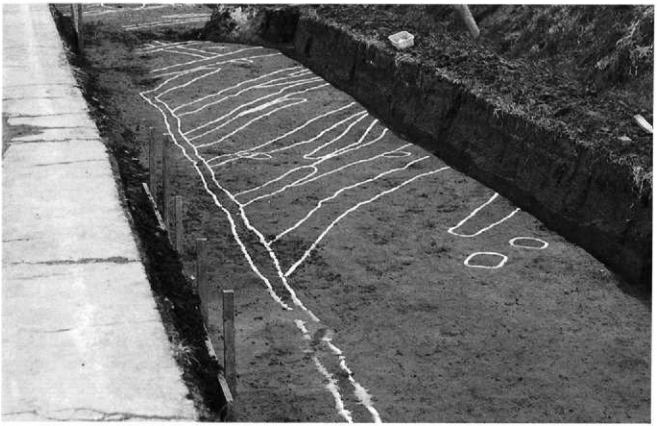
ＳＤ231溝跡土層断面（南西から）

ＳＤ231溝跡遺物出土状況（南西から）

Ｂ区１～４Ｇ完掘状況（手前東）

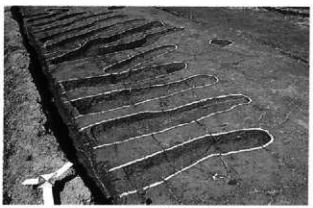
Ｂ区ＳＧ10河川跡，35Ｇ溝状遺構群完掘状況（手前東）

図版 8



E 区89G 溝状遺構群検出状況（南から）

A区71G 溝状遺構群土層断面（南から）



A区71G 溝状遺構群完掘状況（南から）

B区53～58G 遺構検出状況（南から）

B区53～58G 完掘状況（南から）

ＳＧ10河川跡土層断面（南西から）

ＳＧ702河川跡、ＳＸ701土層断面（南から）

ＳＧ702河川跡遺物出土状況（手前西）

ＳＧ702河川跡遺物出土状況（手前西）

ＳＧ702河川跡遺物出土状況

ＳＧ702河川跡遺物出土状況

ＳＧ702河川跡墨書土器出土状況

ＳＫ648土坑製塩土器群出土状況（東から）

図版10

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

12

13

14

15

16

17

21

25

11

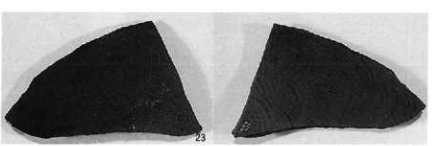
18

19

24

20

26


23

22

27

28

29

30

31

35

33

34

32

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

図版 12

49

50

51

52

53

54

56

58

55

57

59

60

61

62

63

64

66

67

68

70

65

69

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

83

81

82

85

84

86

図版 14

87

88

89

90

91

92

93

94

97

95

98

102

103

104

105

106

96

108

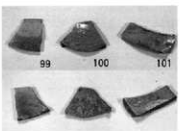
109

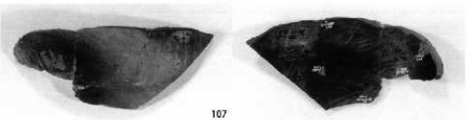
110

111

112

113


99 100 101


107

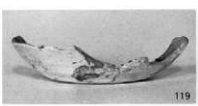
114

115

116

117

118


119

120

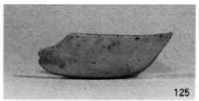
121

122

123

図版 16

124


125

126

127

128

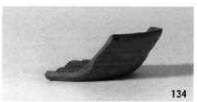
129

130

131

132

133

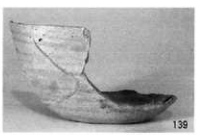

134

135

136

137

138


139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

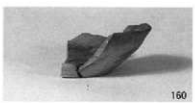
155

156

157

158

159


160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

図版 18

172

173

174

175

176

177

178

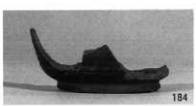
179

180

181

182

183


184

185

186

187

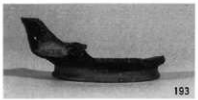
188

189

190

191

192


193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

図版 20

216

217

222

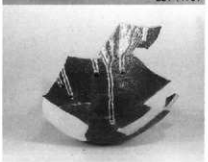
223

214

224

221 (1/8)

219 (1/8)

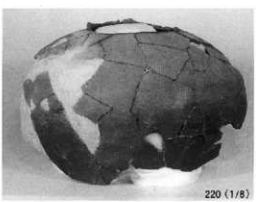


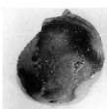
226

225

218 (1/8)

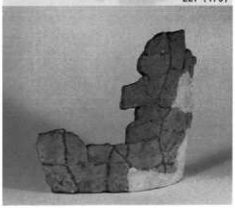
213 (1/8)


220 (1/8)



215 (1/8)

227 (1/6)



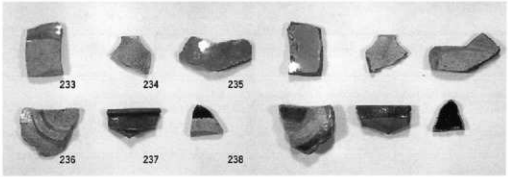
228 (1/6)

229 (1/6)

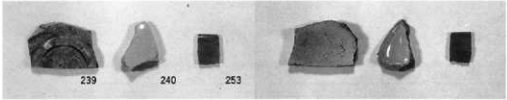
230 (1/6)

232 (1/6)

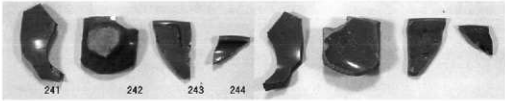
231 (1/6)



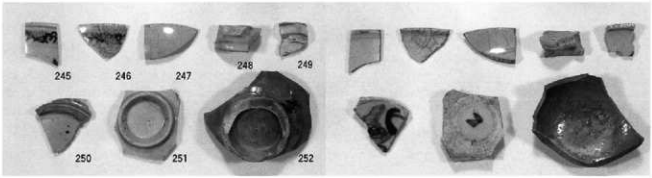
308 (1/2)



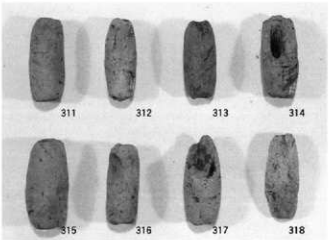
309 (1/2)

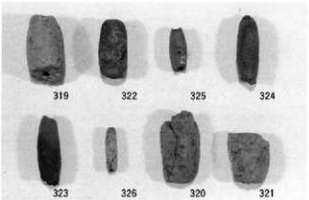


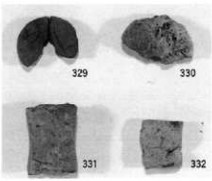
310 (1/2)

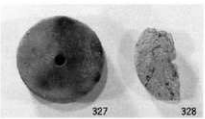


図版 22

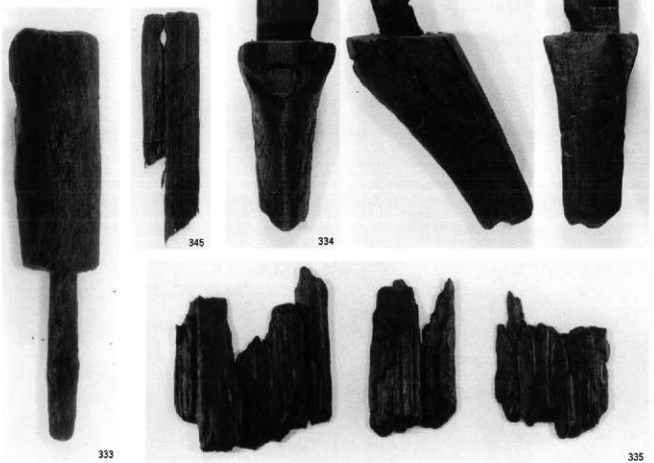

311
312
313
314
315
316
317
318

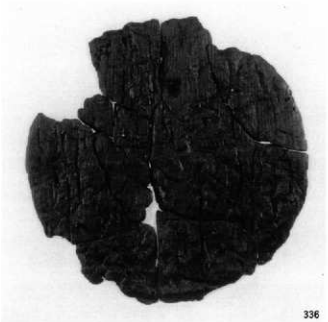

319
322
325
324
323
326
320
321

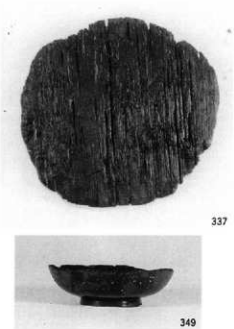

329
330
331
332


327
328

338


333
345
334
335


336


337

340

349

341

342

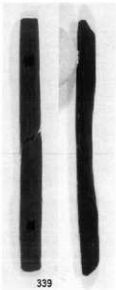
343

344

346

347

352

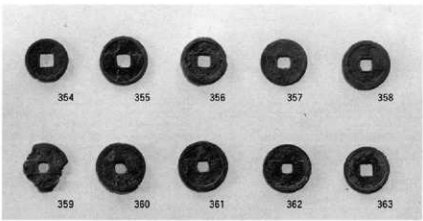

339

350

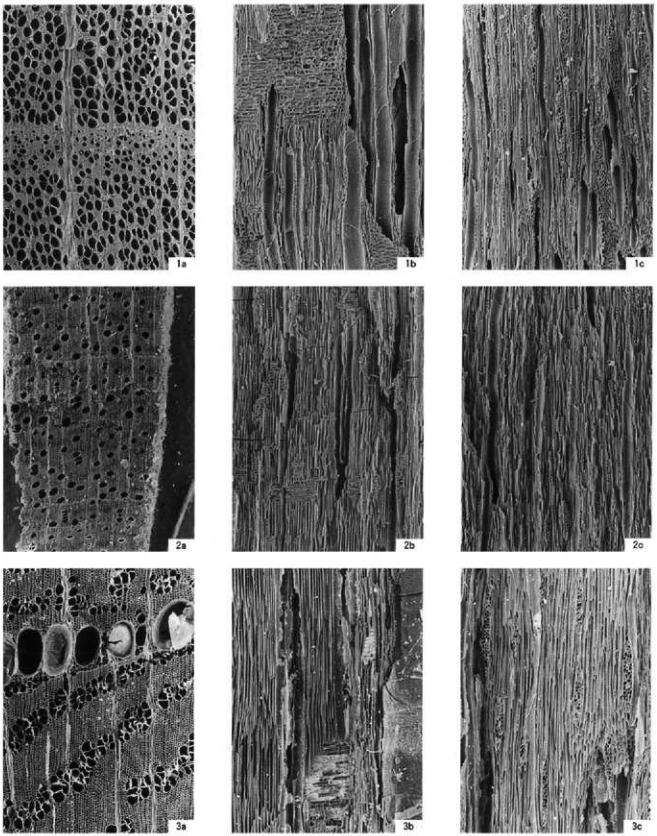
348

351

353


354 355 356 357 358
359 360 361 362 363

図版24　北目長田遺跡・炭化材



1．ブナ属（試料番号1）
2．カエデ属（試料番号2）
3．ハリギリ（試料番号1）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b，c

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第56集

北目長田遺跡第３次発掘調査報告書

1998年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999－3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023－672－5301
印刷　大場印刷株式会社